座右書

五

和書門
類
一七四五九號
一七三函
一三架
七冊

内閣文庫
和書
類
一七四五九號
七冊
一五四函
一四架

内閣文庫
番號 和 17459
冊數 7 (5)
函號 154 211

国立公文書館
National Archives of Japan

座右書巻第五

目録

埜
的串 美布草
敷塚 美敷串
はぐ
日記
再拝
矢代
矢答
拓かけ
鞘緒留板
大射箭
麦皮
引麦

一乗谷朝倉館図書
浅草文庫
花逕家文庫

空穂
空穂に矢さすを
逆頰籙
草籙
佐志籙
狩籙
籙に矢さすを同矢たて○
籙上帯
矢保呂

○一あづち　こる忠ゆき書云大的九物ゆ庫笠置ゆとをもあつちといよ
（きこゆゆき場とこるあるゆゆゆ

一又云九あつちよ祝こがさかゝるゆハ和式の仰をそハ〻それ乃時を
をそ〻きこ
一弓馬秘說云大的事廉立五ふとのをもあつちと可云面と場と云るハを
ま〻こハ但大的ふと又りの時的場と云も為吾れもあたちと云る
仰可給ハ
一弓馬方実云あつちと云ハ的を立て射る所を云又射場と云ハ的を射る
所私の場を云也面ハあつちを射場と云ゆゑ〻云ま〻きる也間
あつちをハたくと云る場をハ〻しらゆるを云なり
一的出張記云あつちとハ川文字ふごりてよ
一諸書南用抄云的山こるサ七尺あ寸廣サ弓杖一杖ま又を丈あ尺もあつさハ三
尺土居ニ寸廣ハたく〻し皆是秘事なり伝なり

弓法私書
あたちの事

一弓馬三冊云昔ハ大的をもつけをのして射手をあつちとして近年芝ゆて
たく〻さるゆを宜うるこれをあつちの寸法不可を はこ山塚と云
あ近年の事こ但小的あと射る時矢のあハ山塚をるゆきこ是ハ法乃外
射手こ山塚と中せをとて大塚とハ云ま〻きこ
一又云かさあげ的場とをるゆを塚などあさ時野山浦まて砂をも芝をも
又ハ地あをも高世ふ塚と中おとくよゆきちげて小的を立て射るをゆきち
げ的場と云こかきあげ塚とも云法量不可有

○一的串ニ布草串　こう忠周書云大的串九物串乃ち其串ひのあらも也
日記ニハなつふとハあけもとと苦ヨリ用法をこれ[illegible]
一又云大的の串ハ白ろ〳〵ふとなり笠ニ乃串九和の串ニ[illegible]
それ那ヲ変布流在知るさは云布的九布笠ニの串ハ[illegible]式の串
のゆ〳〵行ろ〳〵ろうぬきて九ろろこ[illegible]仕略ニ[illegible]
和行〳〵ろをバ式の串のろ〳〵みよすべし
一又会知をけ串のろ茅庵九和大的笠ニの時ハ串をんじて
串をろ〳〵ろのろこ時の変ニ地ヨリ上の寸法式の串のわど〳〵みよえ
そ〳〵ひ〳〵そ〳〵しふとさも式の串わどろ行をそ〳〵し[illegible]串れろそ
ろれ串をおろそ〳〵後の立串まで[illegible]後のうろ串ハよこ〳〵し
ふろろ〳〵しろのうまて[illegible]すゆ[illegible]きころ[illegible]ろの串ハうり表
ろ[illegible]ろ[illegible]ろ[illegible]ろ〳〵後のろ〳〵ハ後の方よろ〳〵ゆひゆ〳〵ハ縄
みそこ義ワ表てそれも後のろまて中ゆ〳〵中一ろ方のろ〳〵一ろり
こゆ〳〵しうけむそいよゆのこ行をおこ[illegible]ろ[illegible]ゆハ也
又白ひのりろ又ろ[illegible]ゆ〳〵行打をおてよ紙こ[illegible]実ろり
一圓的周書云九和ニ庵笠ニの串をハいろれも表〳〵めろ〳〵笠ニの布
的串ニ布草串

そえくゝをそかゝ行まてをゝしてゝ
一扇後云的串をけづるをハゝるゝと云
一射後云布皮の串ハゝゝ行をゝたなて初ゝるゝ布のゝるゝハ細縄
をゝゝゝゝみて立の竹よりゆひ分（竹布の分量ハ法量物ゝゝゝゝ及書記）
一三巻ハ書別記云布幕の串ハ等持院殿御より始ゝる幕をそゝりてゝけ
ゝゝゝゝ一幅（ト）こゝゝゝていま一幅をゝゝゝゝ今ハ布ゝゝゝゝゝゝゝ
六幅ゝするゝゝゝゝ仕布せゝゝゝハ七幅ゝゝゝゝ
一又云打ゝけ串ゝゝゝ危ゝゝ串ゝゝゝ時のゝゝゝ竹をゝゝゝゝゝゝゝて後の串をハ
ゝゝゝゝゝゝゝ

打延串と云こゝ有和漢笠爲よハ高サ大的よハ高サ〆ハ串ハ
寸法乃串ハ高サ平位内のり四ツ三寸半竪串土より上三ツ人七寸
そり串乃ふとさ口一寸四分ハ厚サ　貞文云和串と八漢高和乃和式の串ハ寸法ハ
仮文高高九和の部よあり合セ考ヘ

○一　数塚并数串　射法持長記云数塚の串ハ一人弐寸前と後との名
弓杖一杖後の数つゝ三人寸的の方へ丁出ス前の数つゝの中よ石を一つ入れ也
数塚とわ〆て後よりせきとて射よの可立百ヶ前よ立ス
一　園的用書云数塚ハ弓長の半ハ的の通りよ前の射ゝまゆよ三尺ハ数塚
を立ス前の数塚より後の間ハ一杖よ立て前の数塚より一尺ハ
寸後の数塚を的の方へよせて立ス数つゝのるサ一尺弐寸根のまハり地さハの
ふこ三人よ〆むけその方ハ高ハ〆ハ後前の数塚の弓一杖とハ中せ〆も
ハ高ハ〆ハ弓をすゝ〆前ハ和ゝよ高ハ〆　法
一　又云ふ後の射数ハ寸串の寸方射串ハ高の竹を上の皮をそゝげて長サ一人弐
寸〆て黒ぬり〆し数石又ハ竹をけづりて長サ四前又ハ長サ八寸
ものし　ふとさハ白笹のゝごさ高さ〆ハ　兵
一　又云数つゝるけよ間をハ色ぬし　きるゝ的の射ゝと又ハ射ゝ合も射
一　弓之記云数塚の前よ昔ハ矢をさし　数をとる近年ハ矢のと　貞文云矢ハ矢の上云矢
矢筒ゝ竹の串ハ　ハ矢を的よむけし矢の射ハ弓立の方へ向けてさす矢一度の秘串ハ百ゝ
的よりゆ　百ゝ乃射串　歩射の方ハ高ハ牧ハ

数塚并数串

一 三度出書別記云数さすのハあるべき弓にうたるゝ者と見り十人こ二人
ばかりおはぐびうてあるべいるこうしろよりハ一度もぐびうてあるべふ〳〵次第〳〵
かゝわりより 射るなり

一 弓馬五言云数塚乃寸法乃るゝ日ろこゝろ斗ゝ一尺寸ゝ古的の時弓
立の方ふすゐるゝて二つをあこゝしろの数つゝ一尺寸的の方〈者る二乃
同弓杖一ゝたゝるよ寸〈〳〵 自文云後の数つゝを的の方〈ゝゝ寸ゝよゝてつゝるゝ者
乃者ゝより後の射ゝを的後ゝ寸〈ゝ数ゝ入ゝ者るゝ

一 的出張記云数塚のるゝゝゝ人或すゝの的の方〈者ゝ弓杖一ゝたゝ
ゝゝ〳〵弓の長ゝ寸ゝて後の数塚をゝゝ人あすゝ的の方〈者ゝゝ

一 又云数つゝゝと云ハ歩射の時数をゝすゝるゝゝてゝの名ゝ弓ゝ者の役ふゝて
ゝの行をゝゝゝゝゝ人或すゝ切てゝゝゝ〳〵ゝゝてゝゝゝ〳〵ゝゝゝゝ〳〵ゝ者ゝゝ
数塚のゝゝゝゝ者ゝ十ゝ者ゝ人ゝ矢ゝ者ゝゝゝゝてゝゝ歩射の時ゝ用ゝ
ゝゝゝ者四書或ゝゝ及あゝゝ者ゝ歩射の時ゝ用ゝ

一 又云獨弓ゝ射ゝ寸ゝゝ者ゝ数ゝあ十ゝ完ゝ者ゝ〳〵ゝ者陽者弓の数の者
ゝゝゝハゝ後〈者〈ゝゝ拙ハ同者弓

一 弓之記云数はゝ乃者ゝハゝゝ 些文前ゝ記ス故畧ス前ニ悪按と記さゝゝ元今けゝと記ス
負文按的出張記ニ弓太部の役ゝ〳〵てトアリ此数串ヲ作テ
進上スル串弓太部ノ役也数塚ニ数串ヲサス弓太部ノ役ニアラズ射手各サスヘシ串ノ数五十トアリ
百手ノ的ノ時ハ串数卅百アルヘシ五十ヲ四度出スヘシ又按スルニ上古ハ正月御弓場始以下ノ御的ニハイフ

モ数串ヲサシテタルナリサレバコソ数塚ヲ必ツカルヽ也後ニ数串サス串ヲハ略セラレシナルヘシサレトモ其古風
ヲ残シテ数塚ヲハ必ツカルヽ也百手ハ別ニ式正ノ串ナル故是ハ必数串ヲサス串ト見エタリ

一 射手方周書云ゝ寸塚ハ二ツの同弓長ゝ寸ゝ戻ゝ〳〵ゝ的〳〵ハ八人後者弓乃
数塚ゝゝゝゝゝの数塚ハ一人あゝ寸ゝ人〈出〈〳〵

一 弓馬三冊云数はゝゝゝ数こゝゝ〈出ゝゝゝゝゝゝ弓ゝ者ゝ
むゝゝゝ弓ゝ者ゝ御ゝゝゝゝ的の役也矢代ゝゝゝゝ

○一 はぐり 圓的周書云はぐりは寸方は半長サ二尺七寸斗こゝろも一尺八寸
斗也あつかはてしを縄まて二重ふ結てかけむすびいよすくし金中をとゞ
二重ゆひて夫もとゆむすびいまて弓之ゝまて結こゞさよいゝもこ
ゆゝゝゝみてあはゝゝゝとゝゝゝれひゝゝ板よくゝ入てまをゝゝゝと加ゝ
まゝてとゝゝのゝゝ一尺八寸斗まてゝゝゝし長サ二尺七寸斗よくゝてまく
ゝし次第ゝ末の方ハおこゝゝより細くゝゝし是ゝ的をゝて射ゝゝゝか
ゝ地より上ゝゝゝ可ゝゝひ射ゝゝてはぐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝを地ゝ射てゝゝゝのゝゝはぐゝゝを入てゝゝゝし弓射ハ本月のこゝゝ
面まてゝゝゝし射ゝ乃小的を射ゝゝゝゝゝはぐゝゝゝゝゝゝゝゝを中也
是をゝゝ射ゝゝゝはし的ゝゝ弓のゝは方ゝ的ゝ地ゝ是ゝゝ 法

一 又云此の方まて的を野ゝけゝて射ゝ射ゝはぐゝゝゝゝ弓ゝの
方を是て的あいをゝゝゝゝまて射てはぐゝゝゝゝゝゝゝゝゝ的をゝて射
ゝ射ゝの小的と中ハはぐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ的ゝゝ射ゝの
はぐゝゝゝ射ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とゝハ[illegible]を初こゝきよりこゝてそれを[illegible]
[illegible]ゝ絶てハ二ツ中一ツゆゑ切口より[illegible]
より三ツすゝ三ツ（し　兵　けすゝ法別而ゆとハ遠い為ゆ梅原先不審

一　又云射甘の小的とゆゑハ[illegible]ゝ小的を立てるをゆゑ　（名添まあけ口行　兵

一　弓て故実云はゞ〳〵と云あの事初こゝきし　コヾナニ小的ヲ立テイル之

あゝゝゝさハ三ツ人ふゝ[illegible]ちさハ二ツ人平にして二ツ絶ゆて結ゝ見を射分とゝ云

貞丈云初こゝきとハ初こだゝゝゝゝ[illegible]田舎の百姓の家ゆゞゝて居るむゝゝ

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

○一 日記 こゝ忠門書云 九おの日記よハ九物射ゑとゝゝし事の字ハ大遠
物ゑ組事と書ゐゝでハゝゝすゝ也笠原の日記も笠原射ゑと
射ゑと沙書ゐ ハゝゝこゝおの射ゑ時も日記ゑと百手
事ハ字ゐゝゝ さるゝ

日記の事ゑゝの部こゝあり
こゝ命をハ部と記ス

一 又云笠原的茅原九おの挾物射ゑとハゝゝゝ
書れゐ時二枚ゝてこゝ二枚ゝても奥ゝ
紙をはゞ事 法ゝちゝゝゝゝゝゝ

貞文云大的ハ不日記のゝゝゝ
ゝゝ忠別のゝ

一 こゝ忠門書別記云射おの日記よハ九おの射ゑとハゝゝゝ
おの日記ゑ大遠おゑ組事と書ゐゝでハゝゝ
ゝゝゝ而ゑゝゝこゝおゐゝゝゝゝ事と云字ハ大遠

一 又云笠原茅原ゐおゝゝゝゝゝ事と云字あゝゝ
ゝゝいゝゝゝゝゝゝ

一 弓法私書云凡物射手挾物射ハ而ハ射ハ弓場始射ハ竺葉射手ハ皆ハ射ハ
とゝろの日記ハ書ハ事と云字のまさる後自然可笑時ハ大遠あの日記
張りて大遠物射手事と書ハ能ハ事と云字を書ハ
一 又云ハ竺葉的第一番凡物爽物あと日記を付て射射方物あハ二枚もこ
枚も紙を奥へ續色さるゝ様さわゞハ一枚紙和俗あれとも敷人乃射
書き得ざる様ハくのこと
一 竺葉風書云今ハ所的ハあるゝを世ハ竺葉の的そゝれるを
くゝるくすゝさゝ 夏人云所的ハ公方流の大的也大的のあるを黒くするハ古義也東鑑ハ
ハゝるを黒く書る藤金時代ヨリ乃ゝるゝゝそれを黒クスルハ彩色ナリ
又云昔のハあるゝを黒むる也 竺葉のあるゝ
一 ハ竺葉矢的法記云竺葉の射日記付出ス乃事射ハ多ゝ後又神事竺葉
の射ハ白葉を黒し様を濁決して出ハ常とハゝるゝさゝ
一 又云硯の事筆ハ二笑墨ハ三挺也刀水入出事常ゝ可ゝ一笑ハ射
ハ射名字を丁書事也一笑ハ矢の射ハ名字を書ハ又矢数をけしゝる
事ハて射ハ射名字を書る方成逃孔也射希ハ射ハ人乃可ゝ
ゝ但大遠あの射ハ相ゝる事也

一 又云文葉の事ハ公方様御射ハ日記を文葉ハ書て丁付御見物
乃射ハ文葉ハ書て丁付ハ又ハ大遠あの射ハ細ハ各別の後ハ射ハ
文葉ハ書て丁付ハ又ハ四の者射射ハて文葉あの射ハ文
葉ハ書ハ可付ハ也
一 又云竺葉の射日記付ハ料紙ハ公方様ハ
但歩射的の日記ハ同
一 又云日記乃付様ハ射ハ射ハ射ハ人ハ一向ハ也ハ細也於為家ハ後
ハ唯ハ射ハ射ハ射ハ初ハ記ハ
一 又云ハ射ハ事日記ハ●ハ射ハ射ハ射

一

八週日記ハ俗ニ大遠ノ組日記ト申ス

上下ノ巻ニ分レ候ハヾ上ノ巻ニハ八人のうハ先人のうハでなどと云ふ〜沖ノ方〜

四ツノカドノ次ノ方ヲ云ナリ

何ノ人ニ也端の上ニ一書奥の上ニ二書端の下ニ三書奥の下ニ四書ニ検見ハ奥ニ検見と二字書てそれぞれ検見の名字と官途と書ク喚次ハ検見の名字の名ニ喚次の名官途を書ク為ハ名を書ク喚次と云字ハ書ク内外乃検見ハ内外の検見ハ貞丈云ニ騎の検見と云ハ外の検見ハ喚次乃ち作とする依てこれハ日記ニ喚次と云字ハ加ぬ也検見喚次と為役の名書ともせざる場ハ検見ニ成る者ハ内ニ内外の検見ハ日記乃奥ニ内の検見の名官途を書て奥ニ内と云字ハ書ク外と云字ハ書ク〜て次ニ外の検見の名官途を書ク内と云字ハ書ずに人の名字ハ〜て書ク内の検見ハ富尤又者統の人勤之外の検見ハ日記付ノ前ニテヨハヘルナリ

ある時ハ喚次ニ成り外の検見ハ内の検見ニ成ル時ハ内の検見ハ外の検見ハ内の検見の中分ニ成て〜ハ〜〜〜

年号月日　大追物手組申ト検見ト喚次ト年号トハ同じ通ニ字カシラヲ書ク
射手ノ名ヨリ一字下リナリ

射手十一人すべて十三人すべてもする時ハ但番のあるハ別の書紙に仕書
右の日記にみえぬこと多し　日記ハ書ハ書くとも俗ふ系の射手を名字ニて
の脇に名字と書こと多し　日記ハ名字なくてや大追物射手の系しるるハ恵の
名字よりも文字を別てちいさく風の奥の上のそとに書こ　貞丈云　右ハ大追物の日記書ヤウの大方なり
以前日記乃書ヤウ様しの字ひ方違あり
大追物の仕書ヤウ様しあもハ今異なり

一　大追物風書　一色ニ風書ニ　手札乃寸法　弾正ハ八寸　横一尺　動さ　あるこ　矢ふ　しよ
ひりの也　紙ふとハ　分ハ　ふ　次　貞丈云　これハ紙乃日記の略こ　又云　これハ日記を作
さと　ちる　附ハ　弟可分心　あさ　射手　ふ　みて　ふ　ちかり　ふどあ　はぐ　さ　ちげ　さ　紙ふ　ふ　附
可分こ　書紙例式の日記の如し　端奥　射手ハ　こ　用ふ　ちあ　す　次　検見　喚次
書ふ　風こ　次　年号　射手　例式　おく　ふ　書ふ　ふ　ふ　次　但　又　大追物　手組
射手　文明二　四十六　如　可　書こ　これ乃射手大追物方ヤウ書ふ　ふ
一　大追物射手可分　次　ふ　札乃射手　れの　ふ　表　ふ　ふ　長サ　こ　二寸
也　長サ八寸　書紙ハ　字　初の十丈　書こ　ふ　十丈　と　札　差用して　可書こ　大追物雑ニ同

○一　さいてい　風的風書云小的の付さ　さいてい　的　ふ　ふ　ふ　射手
ふ　ふ　こ　射手の長ハ　こ　こ　人　部す
一　又云　ふ　て　風的の　ハ　ハ　ハ　弓　を　射の　設　さいてい　的　を　ふ
て　追進上ヤ　物なり
一　大追物方風書云　さいてい　の　射手　射の長サ　一尺　ふ　こ　分　一寸　差て　射手　ふ
ふ　ふ　ふ　

こたけよりて中を二すぢにておろそさこて紙ようにておろすゆのしし
図紙ハ引合をこまい(カサナル)そてこるもけよりに切こ串ハ九くそるこ串のうらをおろ
ゆ面方をそくるゆ秘事こ

一 上質抄云さいそいの事引合を一こるゆをこさぐりにきりて中を切て串ま
そさこてするこ房さ一寸三分ゆ法量ふし紙ハ一さぐりまこ紙の数も
ゆ紙こたゞ一こるゆを切てこさぐりにするこ同串の長サハ一尺二寸に削マ
て紙をそこるゆ方をハふふくこして一こるゆを切口をとりて紙をそ
こみて切もてる事の長さ(カヒラヲツキテワルユ一方ハ長キナリ)紙をまきて長キナリふくさ紙ようにて二まきよを
うとゆけ切ようゆひてまもをひまもひてこるこゆかめをあて紙よ
ゆをゆこねうさゞがたのこむそゞるこハはここてりとむるこ但さいそい
の紙まきこる方もてハふくこ一刀そぎこる方の角ゆむをびるゆがよさ也
一 弓法秘伝図書云さいそいこいこうらくゆこの事串の長サ一尺二寸(曲尺定ノ)ゆ切口ゆ分
乃面を九くけつるこ紙をそこるゆ方片をぎゆするこそぎそることりて結キ
方う(前ニすれこ)ゆ(ようゆ)ゆ一寸ゆ長こくこ一刀さこるゆこ紙をそここて後紙ようゆて
二すこ面をとりてきゞこあの上ゆて結てゆ方のそ紙切てこるこ串をゆ
けこぶゆこ紙ようをさげゞのゆこけこいこそいハ大遠ゆの時も的の時と

図事こいの紙ハ板ゆ又ハ引合ゆもてもよしゆ板ここゆハあさりゆこあこりゆ
ここそここゆここ板ゆりゆ板ゆハここりゆここゆこてせあをこて紙ようこて
ゆここるゆ(せあ上こゆこ)紙をゆとこさゞここ
一 又云さいそいハ的と大遠ゆよゆこでハふるこすゞこさ
一 弓馬三冊云ゆ廉九物笠ゆここさこゆあよハさいそいふるこすゆ大遠
ゆ風的ゆ記る事こ
一 風的射ゆ見悟云さいそいの事ゆ或ハ引合ゆ也又内こゆの時ハ何紙ゆてゆこする
紙ゆこさ紙こゆ又云さいそい切紙のゆ事ゆこ板こゆここさぐりゆ板こゆて
ゆさぐりこ板こゆて(さこ)串のここをこりてここみて紙よ
ゆこて結てよ(貝又云さいそいのここら方ゆこ)但振こゆ初中後のゆこ(ゆ板こゆて切
ゆりこ云ゆこここら方ゆこ二ゆりゆこゆりこゆりこゆ板こゆて切ゆ
こここここゆハ大遠ゆこ用こここ数ゆこゆハ的こゆこゆ片一方のゆり数ゆこゆこゆハ一倍こここ二板
又云さいそい事のゆ長サここゆハすこゆの定也こゆこを九くここを鈍こゆ切
一 (貝又云さいそいのここ)但行こてゆこる也矢筈竹のゆこ又云こゆこ
又云矢中ゆハこゆこゆこゆこゆこ中也筈ハさいそいを振(さこ)振紙ハ中(アタリ)をふる
ゆハ的射的と二度こ的振て振(さこゆ)
貝又云弟こゆこ射的ゆこ的こゆこここここゆここゆここゆ

一歩之廉書云さいていの串大進物の時乃串を平又次郎宗信より頂戴さるる
時宗信より相伝の分之串乃長サ一尺二寸也串ハあを丸く削る紙を切る
切くの紙ハ串よりそるむ也さるハ白方紙だけ一つ半分ハ切るくしこれ
くるくるあハ白方よりさらり数たりあるくしかハ白るよりてそるみぎそ
せあを入る紙ヨリナリ如くこれのりまて結ハ二まそまきて串のあるくるよりて結ぶ
同時ハ白方ノセノヨ入サル時ノ串ヲ云ナリ紙ハ切れハさらり数十枚あるくしもあ者云く
一大進物磨洗云さいていの串ハあをすくしあすくるくす串の
寸法一尺二寸也串ハあを丸く削る紙を切る
長サ紙一つけ半分ハ切るくしこれ
串をとりてそるむ紙ハ一寸四方切てそるむ
一色大進物廉書云さいていの串乃長さハ一尺二寸ふとさハ四方ハ金あをかくしらを一
方よりそぎて指よりてそるむ次そるむ紙ハ引合をひろさ一寸四方こけよ
さりけて中を二まわりて二合てまそまわりて串のとりくそるむ紙くしは
ひをつすハりとさて指のりをさざこて紙よりまて二まを結ぶ
一大進物廉書云大宗良中書さいていの振舞乃さうでんをあ此

是持清作メ 政清 元清あつさ乃ゆ 長サ一尺貳寸

リメ

云のあをて丸くあつまやはさいていの紙ハ方ハそるむ引合あてを
キサミクホメテ紙ヨリニテユフ所ナリ
ふいそるくみてもこまをけよさうり中をおをきこ水引まて二まハ一ゆひて
くしれをける紙をさるくし
一大進物馬足云さいていの乃串ハ長サ一尺あす金定ひろさ七分四方あり
串ノ中ヲ云
四方四方紙乃数ハ二枚上よりあ分さけて紙よりあて二まを結くし

○一 矢代　射法持長記云矢代乃事祈仕布也数塚のある時矢代のふり
ゆゝすゝ塚のおれうどうりあり時てらしらの数塚はれ者る時るゝ十
人すてのゝ之十人をふうす塚をかれす（十人の時ハ五人宛立ゝ
うすをさうすゝも十人乃矢数之ハ　○私云くゝ的の時ハ
一又云矢代ハ下矢をハ矢さきを的へむけ上矢をすゝ的へふるゝ
上矢より立て可射なり勝負ハ射る者矢代をふるゝ
物見を可矢也又勝負ハ射ハ中ハ矢代をふるゝ也しらの矢代ハ
的の方へ出へき也
一又云勝負ハ的の矢代のゝ　勝負ハ的のちゝんまて之後この
乃矢代をふるゝ　ハ前の上矢ハ
ゝ後の上矢をふるゝ　ハ前の上矢をふるゝ
一又云さう羽の事一ゝ　ハ前の上矢をふるゝ
すちゝてこの矢をそゝ人の矢代ハ
流て同長さゝ　ハ
一器物記云矢代を
九ゝふるゝ今ハしらをもんゝ的のゝ
矢代

サカ羽ヲ事クジ的ノ部ニアリ見合ヘシ

一 又云圓的の時矢代のふり振の事 四ツ立ふる時ハ矢代を二ヨリとりて
立ハ方ヨリふるを左て一ツを振しハ振しちと引ひを立て今一ツを又
振しとちがひ一のあとを振しこの時も矢代を合て
立の方ヨリ立て振こと時も一ツ立
ふりひくとちがひ一の始ハ矢代ふる時ハ一の始振るようハおて
始しむけてぞんぞうけわどおしてふる射る時ハ矢代のこと始むけて次ヨリ
おいにしがの振るようて立ひ
ふこと中てこの上矢立て射る上矢
射てこ次ハ中の下矢こ次ヨリ立て射しこ立ハ立
の時ハ二ツ立ハ上矢も下矢も一度ヨリ立て射しこ立ハ
くて射る多時ハ二ツ立ハ分て振しこ立の時ハ
振しとちの射るハ中ハ一の始ハ射しこ矢代をハ始ハ射る中ハ
ふこ 稽負ふて ハ射ふと 用ふ
二ヨリて 射ふと 用ふ
自然用ふとうち合ふ 射ふる人矢代ふ 又稽負ふ

一 圓的周書云圓的の時矢代の振の事 矢代を出をを立て能こまぜ合て
左のをを後ゆりて右代ひまて右の方ヨリ後ひ しさのよ
矢をを右の方ヨリ振ヨリ中ハ腰を
ふをを右のをを立ハ立後し神仏の方右の方ヨリ振ヨリ
ふをを右のをを立ハ立後し神仏の方
七八寸をぢかへて矢ををいふもをぐヨリ上矢をハ神仏の方
出して振しこ三ツ立ハ中ハ射をかをこ三分二を前振しとちハ
一のあとをを立ハ中ハ二ツ立ハ中の方ヨリ立て
稽負ふハ前の上矢矢代をふふしとちがあハこ
ふハ上矢ぐふ中しこ中ふを立て稽負あハ
をを振しちをを立て稽負あハ射をハ矢代を振し
かをを持ふ人ハ科をを立て立 弟子ハ稽ヨリ立 濃
又云矢筒ふ的矢こをぞんぞうこ一をハ入ふふハ矢代ヨリ
出をを也自然同し振ぞんぞうふ時ハ人分ヨリ今一を立出て合て人
ふしをを立圓的の時ハ弟子ハ中ハ射ふ中ハ矢代ヨリ出をを
中式ハ中の神仏ふと矢代ヨリ出をを射ハ脇ふ人数ふ射ふ時ハ矢代紛れ始ふ 円

ちよりうる時も右の通り射る矢代を振し猶負るき時はとち
ゝ何度も矢代をふる（し又とちの人もろ〳〵猶負るも紀時は前の上
矢に何度も振（し行く〳〵ふるよりあるべし　刑

一　又会圃的に対矢代をふて前の射るのうゑ立の
きもよう二枝斗的の方（出て裏て神氏の方を去る外て矢代をすべ
金を左（移ぢと一たのるるふて矢代を初る振る右の方より後（也し
て同左のるるを後（也して矢代を左のるる拾れませてうゑ立まの
射るの通をよう振始る（し下矢をもつて上矢をびだ人とこれ方ゑ六
寸斗下矢より去る立（し神氏の方的の方（西（し次第より後（振（し
神氏〳〵け的の方（ふ〳〵（虹形）の振る次第〳〵より的の方（一見わとてふこ考
て立る（し人数ある〳〵て矢代のうゑ紀時は矢代を二つふて的の方
（のけてだんさう同的の方（西振るふ（し二つ立の時は矢をうどく〳〵
こ拾人射るあ〳〵ば矢代は前るふ（し又かるを引のけて殘る分て
矢をうるを振（し二つ立ふる時は人数はいるわともあるは此分て振（し
二分二は前るふ振（し一分は次るふる（し立れるふ矢代をふる時は射る
は内るうち前ふとう〳〵ふこ人拾はふる（し上矢下矢高りてあ〳〵は

こ人拾はふる（し上矢下矢高りてあ〳〵は上矢の矢代をふる（し下矢
のの射矢をこ立（し又下矢斗射高てあ〳〵は上矢は射矢をこ立（し下矢は
矢代振（し高りるこ時はとちあ〳〵はこ立とち矢代ふる（しとちるき
時は前の上矢矢代をふる（しあ〳〵ふ的多るて地より射る射高
るる人振（し高りるこ立ちるき時をるの上矢ふる（しとちがち
らばこ立ちる矢代をふる（し矢代ふる時矢をふ後（あ負ふ中〳〵より拾〳〵
神氏の方は右の方（出る振より後（也し第〳〵拾るる（し高りた
るて地より的たる〳〵は拾より射るて矢代ふる（し　刑
一　又会圃的の時人数多てうゑ立せこき時は矢代をいるの射る多て当ていく
うゑ立るとぬる（し降〳〵振る〳〵も来拾るる（し　日
一　又会圃的に対時移りうゑ立に中るる是は和式なきるこ立時拾る
高りの立る時恵の射るとと〳〵ぬけを出をこ（し高りるき時は恵の射る
る〳〵一分て射矢をこ立は射るもでるき人又あふど　する人乃るる
る也一向の略儀のるる之　刑
一　弓礼秘伝書云（ヨナ）為（ヨナ）高流（中巻末）よりこ立いつと為と云こ
為る人ぬる時は上矢の為下矢の為と云こ元来移りと云るは見

あり中る射（フル）るゆゑにて一社の奥より老て弓をひきはずしあるも
うゝ山〳〵さゝ〳〵ばせりて〳〵ハ神もうるはしくつゝまつゝんとて行あるも
るゝを出し〳〵を神もうるとゝ中こゝけちゝ〳〵とまるあるまゝし
一 圖的は書云矢代ありて矢時用りありて矢るゝ矢代の神氏の方をハ
通すゝさるゝこゝ弓立の方ゝをらいりゝるゝ人
のありて自然ゝさりてもあるゝハかゝるゝ矢代の方人〳〵の方をも通
〳〵 刑部ゆ口伝 伝

立アガリ

一 又云圖的の時立ありゝふゝて射るハ矢代を一つゝて振矢代をゝ
てゝ矢るハ明の面方をれゝゝるゝ矢代ゝ射るゝ
射てゝ我と矢代をゝて一乃ゝ立て矢ハ射るゝ方紙
次第〳〵ゝ射てゝ〳〵ゝ矢代を立てハ矢てゝ射て
矢ハ矢人教ゝ〳〵ゝさ時ゝ射るゝ手〳〵伝るゝ〳〵 刑
一 又云圖的乃時矢代を分て振時ゝ〳〵ゝる矢代を矢立ゝ的の
立神氏の方をゝて矢代振て弓ゝ的方ゝ矢〳〵ゝ矢ゝ又弓立
乃方ゝ的矢立ゝ時も神氏の方的の方ゝ振ゝ矢〳〵ゝ手〳〵伝ゝ
る〳〵 刑

一 又云矢代をゝ弓ゝ立ゝるゝ弓ゝの時射ゝの立紙の〳〵ゝ弟の上矢ゝ立て射
ゝて〳〵振下矢立て射るゝ立的ゝ矢ゝ下矢ゝ矢ゝ立て一度
ゝ射〳〵ゝちゝあ〳〵ハ同立て射るゝ二分二ハ前ゝゝるゝ二分一ハ引のけて
後ゝ振ゝ上矢下矢ゝ矢ゝ立て射るゝ人教ゝ〳〵ゝさ伝ゝ
出刑一度ゝ立て射るゝ 刑
一 又云圖的の時矢代振て射ゝの立るハ弓たゝ（ユン）ゝ〳〵ゝ紙あ〳〵ハ下ゝ射
ゝの立ゝと矢代の立るゝハ弓ゝ一枚斗ゝ立ゝ 伝
一 又云圖的の時矢代をハ指頁ゝ矢ゝ立ゝ射ゝ
ゝる人矢代ゝ立ゝ振ゝ地ゝ矢ゝ一乃ゝ的射ゝ
矢指頁ゝ〳〵ゝて神ゝ矢ゝハ矢代人振ゝ弓ゝ的ゝ紙時ゝ的
射ゝ的上矢の人矢代振ゝ矢ゝ地ゝ矢ゝ〳〵ゝ一の
的射ゝ立ゝる人矢代ゝ立ゝ振ゝ指頁ゝ〳〵ゝ射ゝる人振ゝ科ゝ〳〵ゝさ
ゝ弓ゝ立ゝ 法
一 立ゝ矢ゝ書別記云矢代ゝ出ゝ立ゝ矢の手一ゝ〳〵ゝ出すゝ矢ゝ
ゝ也唯のゝ〳〵ゝ〳〵ゝ紙ゝ
一 又云矢代ゝ時の手たち矢の矢代をいろ〳〵ゝ的ゝ人ゝ弓ゝ〳〵ゝ的ゝ

一 おそろしてする事ハいとれぬ事なり きく者のこゝろもおそろしとものゝ事ハ上手共者書を神のごとくなる事なり 中ごろ馬乗ハ弓矢小的の時矢代振乱乃事一番ハ先切者出て弓を引之後ハ中りなる人ハ弓を一番ハ先切者出て弓を引之後ハ中りなる人ハ弓を一番より我ハ矢代（矢代なるべしとうう）を持て出又ハ弓を引之後ハ矢代（とうこ）なる者ハ弓を一番より我ハ矢代を持て出又ハ弓を引之後ハ矢代（矢代ハ一ツもたるべきとうこ）出ス

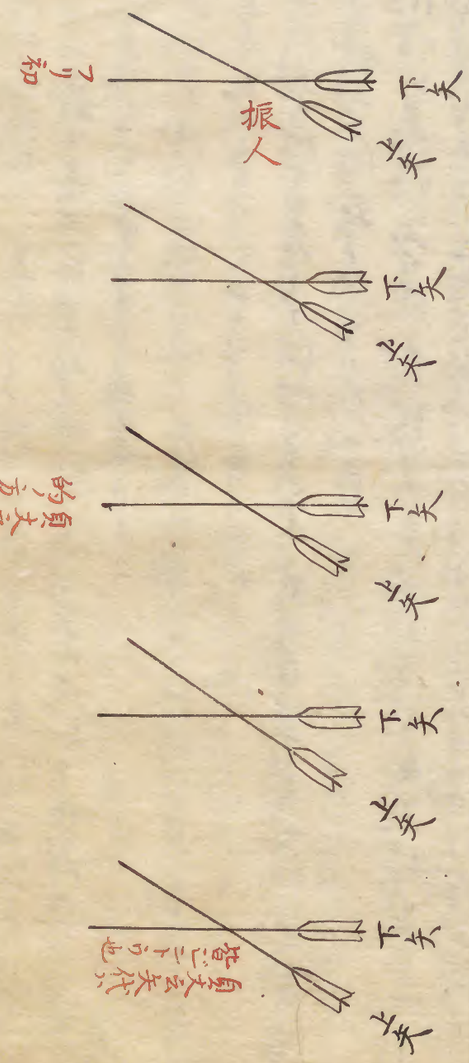
四つ三(し)四十人(ゑ)〜八上矢通り十人そと下矢百五十人又殘の射より始て
百十人の時も同し仕法十人(ハ上矢下矢)と前三ツ三の如くなる(し)
一射手方用書云矢代之事〜次畳て矢を西方の〜なるほうをよくしてすこ
矢を三ほさきをろ(て)て立ようて右の脇(左ニサカテニトルヽウレロニアルトキノ者ハ)
如くふして矢の右の方をあつち(向て)二筋(右ニテサカテニトルヽ)に出して矢の右の方を我右(の)〜
りなる矢一筋をハ西なる畳て上矢なる
すぢ〜〜上矢もト矢とかゝるさすようこ寄ヰをもぢ〜て畳こふりあす
る矢を一筋ハちの矢と云こ上矢の人ようこ三て射るこ弓人数百十人(ありて
矢一度ようふる敵〜バ二よりて畳てゐる
一矢代之記云矢代神ひとハ中なる矢也さぐ神ひを矢代より出すと云
一又云矢代(射手ノ事ヨシ)ハ出て神ひを矢(の)ハ我右の方のなかてのつまげてなて出矢代乃
なる神ひを的より向て畳(し)又こ西ふ矢代なる人あ〜ハ左右のなかて深ス
一又云矢代振なる人ハ人の弓前ようまり弓矢を矢ろ振なる畳後の矢
代を行こ初矢人の矢を能く学こ後ようと上矢ようるこ
一又云射手の面〜一人宛射て居〜人時なる人の右のなかてトなれ左のな
矢深して矢代皆〜深ゆり一ツよこれ合ひさ拵(こ度ハ押まぜ左のなの下

を右ようてさりなるなりしろ(ひ)〜うしろまて左のな(立深)し右のなかて二ツ
宛矢出して下矢ハちなる神ひの方を的の方(向)て畳こ上矢ハもぢ〜
〜ようふるなり
一又云矢代ちぢ(孤の)下矢のそぐ〜ハより寄畳て上矢を畳こ上矢ハ神
ひの方八寸是こ歩(カサス)なる又下矢と上矢の神ひの間ハ八寸也(自矢云右の弓ハ
半なり黒〜)

射手矢代之記こゝろ〜

射手ハ矢代ちぢ(孤の)下矢の方ハ寸(カサス)なり

(ドウ本)



一又云箙の矢代はいつゝ立あるゝ片くはして矢代の無の矢次を入るやうにして我が居る所を引ぬく帰りて人ふと出はいりくはをつきるを色〻考へ人〻ハ〻〻色〻〻〻

一又云箙の矢代を裏ふとして左右のはして射的の方を見て出〻人ありたるよりあやまりこゝ〻〻〻〻〻

一又云矢代なる時云箙〻〻〻〻〻

一弓馬三冊云敷さ〻ちはけも十人射るまてハ敷たらをハそ〻ち置て矢代を
ふりて射るふり敷たらをそ弓ころ（ニシメナ）よいつりつきて置〻矢代ハ敷つゝよりそ
的の方へ弓杖一杖そうり出して振〻ちしろの敷ハ一尺五寸的の方へ出し
築〻矢代をも敷つゝつきてしろハ的の前へ次第よりて出して丁振十人よ
放ハ敷つゝをそりて矢代を丁振そ時も敷つゝの前のこと〻前の矢代
より後の矢代ハ次第よる的の方へ出して丁振の振敷つゝるゝ時も弓立て弓杖
一杖そうり的の方へ出して丁振矢とり〻のあひだハ矢代多時ハあひを遠〻
もせ〻ふり矢代を〻ゝるゝ時ハあひを近〻
又云云あゞりよ射る時ハ矢代振て丁射ふり振ハ常のゆ〻まて矢一つをぐ
ゆ遠るり　頂文云云ありと云る
くしてをの邪よをるす
一歩立躰法記云矢代を一つ引るをハ射をゞりと云
一又云神ふりの矢代をハ射α流まて置き見物流出〻ゆ〻
一小的事云矢代の事ふり始る時ハ弓太刀帯ふ〻き事也弓左帯ふ〻ハ射α中よ
あ〻も初る人よ始て射ゞ次ハ矢代次第よる〻〻
一又云あちの矢代をなゞ振るゆ方ハα にて射るゞ方ハ矢
代乃矢代を振て来るゆ〻片α ゆて射て来て置〻あちの矢代ふるゝ

ダナアガリ
射スグリ
ヨムリ

世人の云ふ〻尚亦よハふるさ〻腰のゆ〻振ハ大の時ゆを次法る時のゆ〻為〻

○一 矢答 射師拾遺抄云矢こゝろのゝすゝひきゝすとゝのゝうゝ射る
矢コヤ、矢サケヒ同事也
附るをゝこゝろゝのゝうゝらゝとゝ（ヲ、ト云ナリ）ゝこゝろを出ゝ（頁文云石ハ大遠ハ乃矢答ヲ云カ）
らをゝゝのゝとゝいふゝ附のるゝ又庵射る時の矢こゝろゝふゝるをゝ
ゝゝのゝとゝふゝるゝ同矢ひゝきゝの時も矢こゝろゝあゝるゝ
すゝと云ゝる矢ひゝきゝよりゝるゝ
一 号和記云ゝを射て矢こゝろゝのゝ何といゝふゝ大遠ハよゝふゝる
（頁文云上石ハ矢こけびと云中石以茶矢答と云）
一 高忠聞書云庵を射て矢答をゝる事庵る限ゝるゝことゝあゝと矢こゝろ
也 又云ゝゝと矢答をゝる事庵ゝ限ゝるゝことゝあゝと矢こゝろ
ゝるゝふゝるゝこゝゝゝ

貞丈云 古代ハ矢ごけびとりひろう夫木抄信實朝臣ノ哥ニみちあわき那波のこころの口矢ごけひよのれ
ぬ庵のこころそきこゆる又平家物語ニ[illegible]
けびとゝえゝうこれゝゝゝゝゝけびとりの間ハ[illegible]
矢ごけひいりゝゝゝゝゝ[illegible]
ゝゝひをつくりてゝゝゝゝゝ[illegible]
ゝゝ押りゝゝゝゝゝ

あそをうあこし行るこそを定親ふしてをあせでをうこれちゝぬとりふをゆ
をゆみを人のこちゝまぜてやをろ通をてをるゆをくふゝをるゝとみゆるゝ

一又云ゆみけ結ふ事うゝる後向ゝふ事葉ふとすゝゝゝ侍あり

一又云ゆみけゆひくをしゆひをうぬき初めゆるゝ一院の御ゝ但侍をゝ

一出陣次書云軍陣のゆみをゆ別の葉をゆひをはぐゝす

一高忠次書云ゆみのゆひをはぐゝる形紺太將の伊時富士の牧狩の時久特を
せゝゝゝよりてちゆひとゝゝゝゆひ乃をゝ弦つゝゝあゝゝ侍ゝゝ
を付方結をゝすし結をゝ結ゝ異葉ゝゝゝ結ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
さをゝゝゝ結ゝゝゝゝゝゝゝ結をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
也結ふ方結ゝ葉結ゝ結ゝゝゝ結ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
てゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

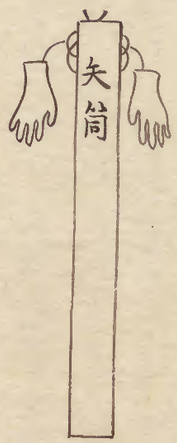
より常ゆるゝして右をよふ云て是付と右をよふ云て是付し（貞丈云左をゝゝさゝで右の緒むすびふくきあ右ゝゝゝゝすゝ）

一又云ゆみをゞさすゝゝゝと云へめぐふゞゝゝ云すゞさゝ

ゝゝゝゝ

内の方を合せて右を上の方まきてたわひの方へ出す〳〵結をかまてゆ
げのくはわひの内へ巻〳〵
一又云軍陣ゆげ巻ふすべ皮たるべし　貞文云こうろ〳〵者水まき
ゐどの者をこうろ
一弓法秘書云湯きふすべのゆげ作〳〵かも似合る之浮草ハ人よりて似合る対文
軍陣ハまきふすべ可知也
一又云三枚束草乃ゆげハ器物〳〵年人ハさすすべきる之
一又云ゆげを矢弓ふとる結付るる之定うるはふ者　貞文云矢筒の結と結付むち
ちよ結付るるるハふ
一又云ゆげよ伝草をもする之但三枚束錦皮ふと詩歌あるべし錦皮と云ハ出
もて皮のたて　柳子　のふきゆ〳〵るるあ之
一又云軍陣のゆげの結のてゝとたむもひよもる之　貞文云ゆげの結の様をむすやる山城
の云所ゆる中対ゆ方国書云ゆ弓記文
一又云竺玉ゆげゆの内をゆる之弓ゆ中之弓を射返す為ゆる
一又云軍陣のゆげ〻同布内のゆ結伝の中結あり
一又云的射る時いるき入る穴をあらるる也も結　貞文云乙矢をさすゆ穴乙矢の
いるきの方をさし入てゆ引ゆる
一又云軍陣のゆげのゆびたぐるるべし　貞文云別のゆ乃章ゆ中ゆいつゆる之
を下て別之の章ニテ指つぐハ知式ニ非ス
一又云ゆげの結の長サハ定もる寸天ハ〻ふ〻〻人のうでのたサよりる〻〻
一弓法秘伝書云矢筒の結よゆげ結付のくゝんゝ之ゝ者ゆ方ゆ也

ふのるゆ〻るもひて付る之
一弓法秘書云矢筒のくゝんより上ハ九一寸計さるゝ〻ゝ也不定せ之結て
足合てもる之又ゆげを二つゆひ付るゆ之ハゆ方ゆ中ゆ付る之一方ゆ二つも
付るゆ〻るゝ〻すゆ内ハゆ〻ゝよゆ方ゆ上ゆ付ゆ右ゆ〻ゝ



○一 ゆりけ結ことあれ 射御拾遺抄云白ふさあのゆりけ結例或のわく間とひて
ことあるべしふこれむすひてとむる結也〻
一 射御持長記云ゆりけ乃結とあれの事（カナタチノ時ノトメヤウナリ）一まきまきて上ようあ〻引とを〻大ひの内より和（まぶして）二まきまく〻し此のことふこまきてよのうゝ
おそうこうむ〻ようひてとるよりてこよ元金てよ〻捨てかより上〻
うゝ（し大臣）和歌の御ゆびよりく（大）〻こまきまきて二あ〻同和
和秘事のことあれ二あり又流鏑馬の時ゆびよりて二むる又金義
場（出御のことあれ大なる秘事なり）馬よりゆりけの結のさきむすよ
事ある〻和歌ある者ふ（うすあふうと初るよく又大臣あの時ふ人ふ
ちゆひふりけて留る〻
一 出陣時書云軍陣ゆりけ結乃曼〻のよ三而結てよのよ
ゆて留る〻まきゆう作ゆ結る〻〻
一 弓馬時書云流鏑馬の時ゆりけ乃結とむる抜の事例或三まゆきてよ
甲ゆて一むすひ結〻これるむすひてとむる〻
一 又云奥見ゆてとこまきまきて例或結ゆ結るあゆて一結むすひて又よ
うあるとむる〻さるる例或より結を長くもるくこれ抜記ゆよ及さるあり
ユカケ結留ヤウ

一又云何なりてもあれうちだちまして射る時はたゆみけすゝと時をたゝるよ
結をとりけてこまを開きて開るゝ
一又云左のゆみけの結をたゝびまるゝ
一あるはゆかけの結をもるをはかちうち大進西笠取昇笠さてと
流鏑るの時とはなるゝてはあるまゝさゝ大笠取の時とむるゝ
者る一奥ゆみけの結留こは也
一又云ゆみけをは袋と云る流鏑るの時ようきうては袋といふるゝ
一圓的は書云かちうえれゆみけの結のあるゝ
方にまいて結をたてゝ上ようりの方にまを
けてまを結て以結まいしうをゝ
一まを三巳まいておまをよりうゝ
結ひのり合てまをりの方ゝ上ゝとゝ
二まいしもする是は略儀ゝ結のさきをむとゝ
ちゝしうる結をゝ結する時結る是をゝ
よりちうる後ゝ　兵
一弓馬故實云一奥ゆみけ結の留結の事　右一巻まきて上ようりにて

あとゝすじて又二まを開とひて又上ようりにて
ろゝ方結の方ゝ引ゝ上ようりにおりうゝ
かゝゝ但ゆみけはりかいてとるゝ
ゝゝ方ゝはりうゝ
初ゝしうる結ゝ方結の方よおしうゝ
一又云右ゆみけ結の留結乃事是もゝ左ゝ一まを開とひ上ようりにて
の内ようゝ方結ようけて又上ようりにて
上ようりにてこれも一奥ゆみけの時乃ことくゝとるゝてさ結をゝ
ろゝてゝとゝ方結の方ゝ引ゝりて下ようゝ
ゝをまゝけてもりうゝし是は必ゝ
一又云武正の軍陣の時ゆみけの結留結の事
留るゝこゝろゝのゝるゝかゝて留るゝ
一又云風ふるゝの時は者の一奥ゆみけのゝ
奥又云ゆみけの結ゝゝ右ゆみけの留結一奥ゆみけの留結
乃ゆみけ留結以上四ゝ也ゝゝゝ軍陣ゝの留結は二ゝは古代ゝ袋のゝ結軍陣
一的出法云ゆみけの結はゝ中ゆゝ
一射手方圓書云かりゝゆみけの時は結をたゝひのまさを後ようゝ有ゝすゝし口

右ゝ上ゝ一奥ゆみけの留結
右ゝ歩立の時
右ゝ結の留結

作るべし　頁文云ハ本文ハ前後の二字書違也
前より後へ引すべしと改む

一又云やうちのゆりけハ者のるる上のかくさして結のとめあをよれ甲より留る
一又云ゆりけうるるくひかゑかくて盃と同事あるふたあるひをむすうす
たるあるいとふうでゝびの皆
一弓法私書云的場おそも人のえんかの方へ向てさすす（ユカケヲサス）さし
一又云ゆりけをさすす　右指の方へさしまはして裏の方（ウナ）の三番目より右指をまげて又ゆびの上よりゆりけ
（カナタナノ時右ユカケナリ）
（手ノカウノ方ニハレテナリ）右指の方へ三番目へしかと三番目をさしてゆびの三番目より引色し
ゆけて出るる三の結よりたを右へひかうよ押込しゝ又上よりゆ押
込るる色ハうるくゆりけのさし結のるる
一又云一具結けの結のとる結のるる右指の方へ三番目をさして上よりゆ引とそして
小指の方へ二番目ゆびの上三番目より上へ上へとゝゝゝけて
結るる結のうを二つよりて中のゆくひをして右より上へ押込し
左り右へ回れ有り
一又云軍陣のゆりけ（乃結）となる事右指の方へ一番目さゝゆびの上よりゆ引色し
て又上より加けてゆるゆるしてゆるの中へ結のうを入ゝ引色ゝ由又右指れ

方へ二まき巻てゆびをとゝ巻て又ゆりけ加へて巻て今のごとく
ゆるゆるして色ハ引きハとゝゝゝゝけて右ふるの時の（大遠カナリ）ゆりけの結
のとゝゝのゝくゝ左へひかりて下へ引ゝ加へとめ右ハ三ツ有り（スナハチ一具ユカケトノヤウナリ）
一又云ゆりけの結ゆるる次ゆ右ふるの時（者ノ一具ユカケトノヤウ）一ツ具ゝ（ふるの時一ツ歩立の時一ツ）
四ツ有ゝでハあるまゝさるゝ
一射る方圓書云ゆりけハ右へ引さゝ和るゝとゝハ一ツ上の時右ふるの後
旅乃時も同左右へゆりけのちゆびよ加へざるゝゆびをとゝ巻て出る也

○一 犬射法の射手拾遺抄云精好をぬひ〳〵うへされあり（クモトナリ）〳〵後結花緒あり花結と云ハ革のうへん掛ものゝ後をみ結ひの事又後の事之ことの中ゝ綿を入ゝるを云之又ものさ常ふとハ紅梅もろし〳〵す略和之 貞丈云タテシヤウブヨコシヤウブノ皮類ノ部ニシルス

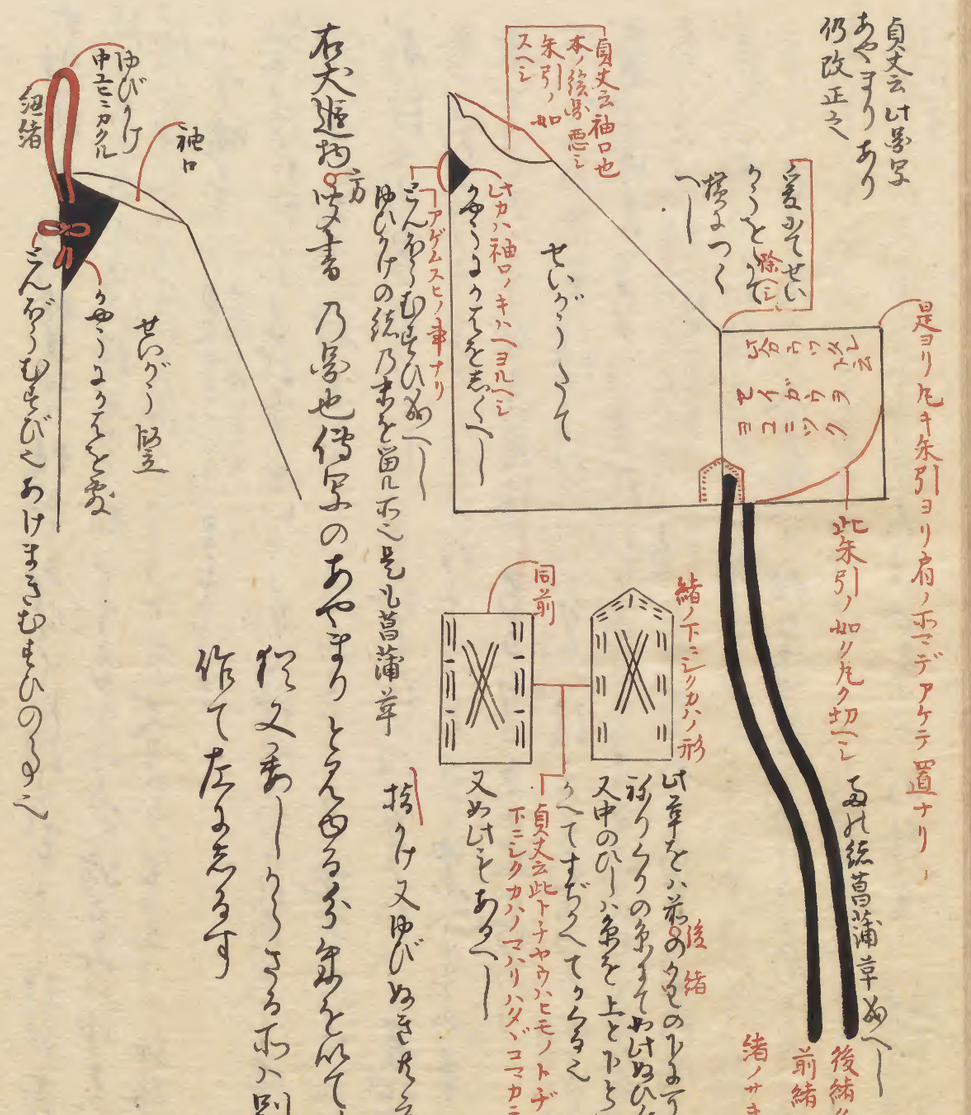
一 射手拾遺抄云ハ射手せいゝ〳〵ゆゑ神のゝうしれあるゝ〳〵結ふとあゝ〳〵ぶりさ引ろさハ射ゝふりゝ〳〵しこみとてとゝハ老者のさすゆゑ 私云コヽニコテハワリ入之

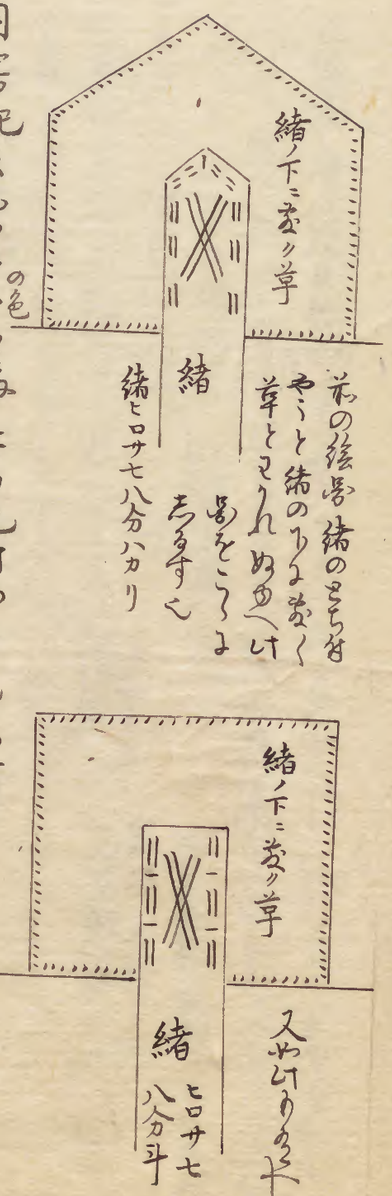
一 扇後云ハゝの結をハ引とさるゝもひて引含てゝ〳〵長結の端ゆて巻てこゝ〳〵しこゝとゝんゝの初ゝゝ菖蒲をゝしろゝ了分ゝ之菖蒲ハ多ゝ分ゝ糸の拡結あり（トテ糸ナリトデヤウヲヲ云）

一 又云ハゝの結ハ多後たこゝ（コテサレテ結ヲムスヒテスアフノウレロノヌヒメニトナ付之）ゝ分ゝ後結ゝ〳〵ゝ（貞丈云スヒメトハ後ニテ結ヲ結ヒ背ノスヒメニトデ付）

一 大進方（物）用書云ゝて井精好（セイカウ）を用〳〵ゝゝ〳〵しゝ〳〵ゝ人ふとハ布ゝ之又ゝ〳〵たん（貞丈云ゝたんハ牡丹也表白東紅梅也一条三条良公ハ拾遺ニ見タリ）ゝゝて〳〵せゝれて不若又周防国ゝひ〳〵内ゝ

金仏寺殿すし〳〵絹ゝて〳〵ゝを用之あゝ〳〵しゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵





一 用害記云小ゆの色ハ紅梅紅白也此外の色ハ何

一 射鏡云小ゆ申根ハ葛布ハ何ぞ近年ハ精好を用ゆ 他のうろ

一 こゝ忠国書別記云大の付小ゆ紙ぞ

の人をぶぐてもゆる ぜあひの色ハ

結ひて毎又右のゆより ぐゝ和ぐて

てゆ ぐゝ門ぐて結ひて いるもの

かゝ ぐいみていづゝ ゆそ

ゆをゆゆなり

一 的出法記云結ゆの結をハ むもとゆ

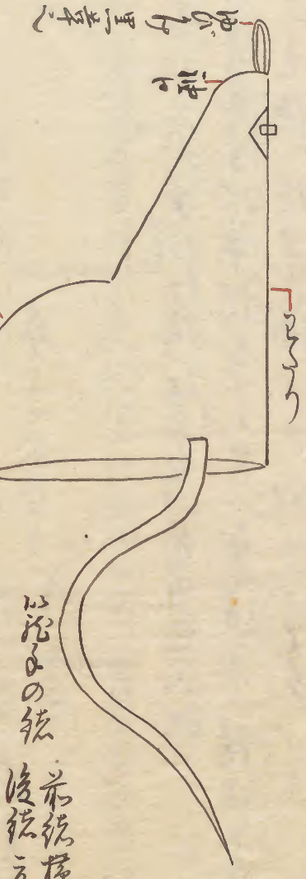
ゆ ぐゝ

ぶ ぐゝ

ぶ ぐゝ

ぶ

一法量ハ異説ニ云大射ハ弦ノ乃事ハ精せいかうの長サ六尺五寸ハ一尺二寸
ハ弦ノ草ハ菖蒲草ハ長サ一寸二分ハ又弦ノハ二
寸ハ指ハ長サ二寸ハ別紙記シ
一又云弦ノ色ハ紅梅紅白黄ハ用之
一弓馬三冊ノ記ハ大射ハ弦ノ事 貞丈云大射ハ二張ノ弦ノ事ハ
前ノ張ハ菖蒲草



一大遠物ハ長サ六尺ハ人ノ丈ヨリハ高キモノ
ハ弦ノ長サ六尺ハ菖蒲皮ハ小人ノ丈ハ第皮
ハ長サ六尺ハ人ノ腕ノ
一大遠物ハ書云奈良ノ文書ニ
ハ長サ六尺ハ方ハ四角ニシテ
一大遠物馬足云ハ事ハ
ハ近年ハ精好ヲ本トス他ノ
一大遠物雑ニ云大射ハ事ハ
ハ第弦後弦ヲ
ハ第皮ノ後ハ
ハ第皮ノ中ニ
ハ小人ノ

○一 袋皮　射歩おもに云袋皮を鞦あるひはすると白毛の方をするの左へ
廻て袋皮の紐を左の方の革に結てむかふをとりて右の方より左へ
引まはしてむかふのとりの入くちにもむ

一 軍陣用書云軍陣にて射歩の弓を鞦にて引うすると鞦あるひを
すきこ鞦あるひは麻の皮袋皮をすると軍陣よりすれば後に鞦袋
は麻皮なれば女麻乃皮略儀に鞦あるひすると白毛さきを後に鞦の革端
乃方へ白毛可成出陣の時は例式白毛左へ後へ鞦の革端
手縄を鞦あるひを叩もむしかみやぶるなを縄を二よりにして鞦の革
端の右はしらうひにしらうひ出ること〻〻うらうこと〻〻して左の方をしらうての右は
方へちと出して是〻〻にて左のしらうてを巻紙にして左のしらうての右は
てさて後は左のしらうてを巻紙にしてさて左のしらうての右はしらうてを巻
右へ出るを縄のつるへ入くわどきやきやきやきやもむるふり
一 袋皮乃はし軍陣用書云ちかく〻ぶ革の半よこちかく〻ぶと云は弓の後
すぐにしるると云これを前結と云袋皮の色乃をさすは時はくしろさより
白モラ前ナレラ袋タルトキノ左右ナリ
乃方を前結にして是〻〻ふと云は菖蒲ふうちかくと云是
袋皮
を後結と云袋皮の色乃をさすは時はくしろさより右へ乃方を後結にて

すそ之見ハさうなく人之存知申し

一 出陣用意之出陣之支度の一る鞍之後ハ支度をする時ハ白毛鞍のお脇
（馬ヲ）し見ハ公之家指列之作也 佛地院の図有ハ之中ハ之作之 後ろ之
も出陣の時も陣所の時と白毛お脇の方ゑる中被申ハ中之作之

一 又云支度を鞍寄ゑ申る事白毛をたを左へ引て丁寧之事之 ハ白さ
縄ゑて左へ巳ゝ もたのゑ（し 敵の方將ゑと対て申る時ハ白毛を前へ出し
鞍ゑおゝ引ゑ

一 又云成流るんとゑ之支度りゑ之る拵ハ白毛を前へ引
を右の方ゑおゝ引ゑ

一 又云的の時ハ白毛を左へ引て前ヒ 支度

一 又云 廣机ゑ支度をくゑ申て廣机を寄て之後支度を丁寧支度の最拵
毛の方を上へ引て白毛の方を上へ引て寄へ申 さゝ

一 又云支度のうゝハ白布ゑ之ハ支度も不書を せゝぶゑて丁寧すも廣ヶ
も不定之の中方あり丁定事也

一 扇後云式の支度を笠袋に結ハ笠之上ハ結ハ笠之上 ハ結ゑつゝ
笠ゑの右の方へ出ゑつゝ

一 之ゑ忠ハ書別記云所的の支度の事 伝ヶ定ゝすと作ハ同ゝ陣ゑて乃支
草乃ゑハ的のゑりも少ヶ廣クと之作ハ同ゝハ白布ゑ移を つゝ
ゑりを ハ白ゝぶ ハ白ゝて こゝハ

一 ちゝる 成支度 ハ事 廣の ハ白ゝる へし 秋二毛 ヲ 毛 ハ白ゝ ハ白ゝ ハ白ゝ
ハ白ゝ ハ白ゝ ハ白ゝ ハ白ゝ ハ白ゝ ハ白ゝ ハ白ゝ ハ白ゝ ハ白ゝ ハ白ゝ

一 財ゑ方ハ書云ゑゝて廣机ゑ腰を 成成ゑも支度ゑ ハ白ゝ 廣支也
結ゝ ハ白ゝ ハ白ゝ ハ白ゝ ハ白ゝ ハ白ゝ ハ白ゝ ハ白ゝ ハ白ゝ ハ白ゝ

的の時の支度の ハ白ゝ 廣机ゑ
ハ白ゝ ハ白ゝ ハ白ゝ ハ白ゝ ハ白ゝ ハ白ゝ ハ白ゝ ハ白ゝ ハ白ゝ ハ白ゝ

（表皮乃ヨウス）布よ形を分てうゝをうりゝ

一 射よ方角書云表皮を鞍虎ふすり附ハ白毛の方を左（ヵ）て結をカ皮ふゆハ分てむるかいあて弟のゝ加ゝむ也表皮りうて秋（フヾケ）二毛を用る之を

あつゝ（ハ）附ちさ皮と中せハ結を分ず鞍虎と中せ皮結を分る布よ形を分てうゝよ手て角ろをあるあり草ふてとるくゝうゝの方ハちとれゝ白毛の方ハ一りんゝ（クラノホヒノ事）ふするゝ（ろ）りんゝを用ハ略儀之事も皮を可用

ゝよ軍陣の附庵の皮を鞍虎よ可用之

一 随云日記云表皮のこゝら（拓庵皮の秋二毛ゝる）ゝ但表皮虎さ長さのす法ろゝ（ゝ）以也も指拓的の附乃拓ゝこゝら（亀）

一 又云高智のるよハ表皮を鞍虎ふゝて元ゝ子（ゝ）因表皮の白毛の方を左（ゝ）ふ子（ゝ）しよ縄ゝて加ゝゝ分（ゝ）しゝ白ゝ結ゝ

一 上賢抄云拓的の表皮の法量定ゝす因陣の表皮ゝゝ定ゝす陣ゝて表ゝ表皮ハ的の附表りりちとひろゝもくゝあるくゝうゝハ白さ布よ形を分て

表ゝを表ゝゝ皮ゝてこるゝ随云の日記よ五ゝし花（ヨコヒヤウブ）結後結（タテヒヤウブ）とりるあり草

ハゝて表ゝゝぶよこ表ゝゝふと云白拓るゝ

一 法書尚用抄云天よハ表ゝよ御殿ハ将軍ハ表ゝよ表ゝゝれハ公方拓のハ

虎乃皮弱の皮天石ハ熊の皮庵乃皮裏ハ刷ゝき公方拓ハ表ハ織物職の方

也右ゝ表ゝこハ虎の皮御免也弱ハ弱ゝぬゝ鞍虎因前之（貞丈云職の方とハ三職の流を云）

一 酌茶記云表皮を表ゝ手ゝを我左（ゝ）ゝ毛の方を上（ウ）ゝてゝ（貞丈云ハ白毛乃方ゝ）

一 弓法秘伝書云表皮のゝ中ゝ陸ゝ拓ゝ形ゝ二ゝ形ハ

一 弓法秘書云出陣乃時乃表皮ゝ（拓的の附乃表皮ゝ）ゝ長ゝ長ゝ

ゝて因白布ゝ形ゝを分ゝうゝ縁ハ黒ゝ表ゝぶ皮ゝて手ゝぐゝ

出陣の附道乃間結形ハて甲打者とたゝ（ゝ）るの左右ゝ走ゝゝ

一 又云出陣の附鞍虎ハ表皮を表（ゝ）表皮の白毛の方を鞍の右ゝ脇の方（ハ）

て打乃因白ゝ縄ゝてゝを表ゝ表ゝ金を右の脇ゝよ分（ゝ）又結分ゝゝ

苦ゝゝ手陣ゝの附ハ白毛を鞍の前脇ゝふ（ゝ）てゝ（ゝ）む之（貞丈云出陣ハ白毛を後脇乃方ゝ）

（ゝ）ゝ手ゝ（ゝ）ゝ白毛ハ前（ゝ）又左（ゝ）ゝ（ゝ）ゝ法書の結考（ゝ）ゝ小笠原播州被申けるとて人知信

仕ひ出陣乃附ハ白毛を前脇ふ（ゝ）打ゝ表ゝ（ゝ）ゝ（ゝ）ゝ陣ゝの附ハ白毛をゝ乃

左（ゝ）て加ゝゝ（ゝ）ゝ彼乃ゝ半の布ゝ遣之布書（貞丈云ハ寄る以後ゝゝ）

一 馬具寸法記云表皮乃半庵皮白之寸法書（貞丈云ハ表皮ハ寸法ハ定ハ但九寸ハ寸法一尺

八寸中ゝ表ゝハ表ゝぶ皮ゝ）

馬具寸法記

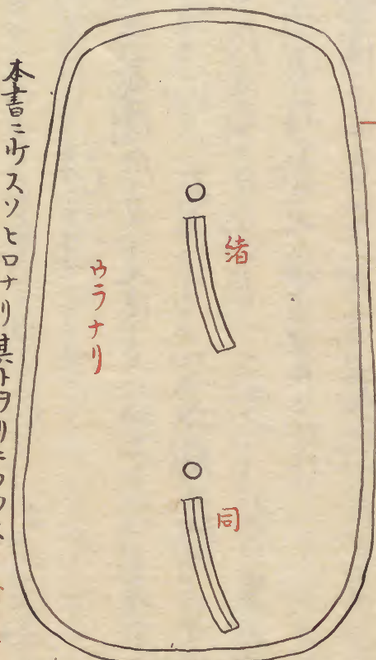
茅皮乃事

初てのもの
その方へ
うゝふ白
布ゆり

貝丈ニ スソノ方ノ(リハ毛ノ下ニカクレテ見エズ

弓馬三冊茅皮乃事

初てのもの方ハ
茅ゆる事あさ
四(今略ス)毛
うゝふ白
うゝふ結ゆり



貝丈ニ是ハうゝふ白ゆりのよする時の結の分様ニ茅ニ茅ニハ結を分ず

本書ニハスソヒロナリ其トヲリニウツス菅蒲草左

一射礼私記云茅皮乃事麻乃皮ゆる(ゝ)毛ハ茅皮ゆる(ゝ)毛の結しゆの結とそ云ふよこ者ゆ(ゝ)ぶ(ゝ)ゆ結と云ふ白て菅

うゝふ白き布を
ぬひ分下ハぬひ合ハ
す茅ゆゝ別(ゝ)
貝丈ニ表ウラ別々ト云ハ
ウラヲ中ニテ皮(メヒツケズ
ニハリバカリメヒ付ルヲ云也
毛ハ鞍ニ上ゆゝる
時カ草ニ四ひ分る

貝丈ニ左(ゝ)ゆる方ト云ハ

蒲乃事ニ毛ゆの表(く)ゝ(く)ゝ左(ゝ)ゆる(ゝ)茅結て云(ゝ)

白毛ヲ前(ナレテ茅タル時ノ
左右ヲ云フナリ

○一引敷　貞丈云引敷一名腰當トモ云引敷ハ毛皮乃ゆくふして結ヲ分て毛の方と和ゆくして腰ゥ
結ひ付る旅行なとに用ゐる之也ハ腰ニ結ひ付るすべて毛の方を上ニ分て毛皮の代ニモ用

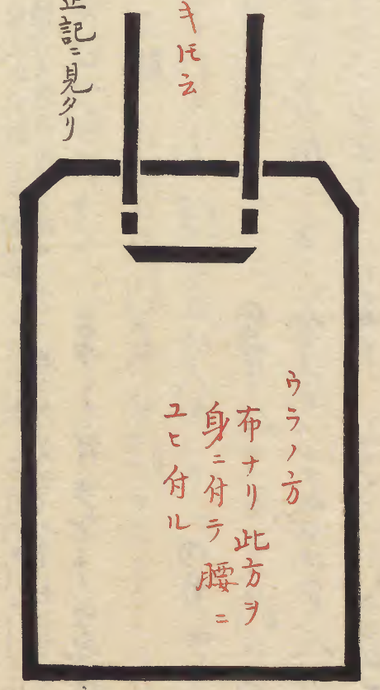
一武雑記云ゑつきとりハ常ニ分ひを中ゆ也鈴鹿の皮をハ平人ハ許
ゆの事ハ二職ハ用ひ用ひ分ハ鈴ハ鹿ハ鹿ハ鹿

方を表よりして下へ絞の行くようにとあり仕廻して後に
為（し）事よりあり仕とて絞とて腰のもの付（し）式の皮ふ
ていなるべし又神佛の前へいらびらこを前へ又中ごの所へ
なして下へ為べし

一又云ひつ皮のもの皮ハ絞の行くようにとあり後に毛の方をしたにして
とあり（し）絞の行くようにとおもひ（形迄）（し）為べし

一寛正記云腰当乃長サ三尺八寸横一尺五分鹿皮筵毛白毛を殺
さし裏ハ濃黄の布 黒皮の角をこれを首上（クビカミ）のすこしにうどと入
草の紐をして布を内よりして腰に付るなり

自文云引為ハ元来法式ナキ物也右ノ寸尺モ大カイノ分量ヲ云也



表ハ毛皮ナリ

自文云寛正記ニハ鹿皮トアリ
武雑記ニハ羯羊皮トアリ太平
記ニ畠山カ狐皮ノ腰當セシ事
アリ何皮ト定リタル法式ナシ
朱書ハ自文加之

○一うはぐ

一射術持長記云秘事は矢の夏山ゐの尾ゆてきうる矢を持て石の足
をとゝ（ぬ）こゝろにて鹿ろん（ん）のあを射まうそすとりうる仕
これはうつかのみよ一二ハさすり事こと云（り）ちうる極事あり

一又云うの分を付るゆさのこゝろ（し）ていろ（し）ゆ（ま）ゝ（す）尾筋をあひうる似
てゆ（ま）ゝ（す）ゝ（し）ゆ（ま）ゝ（す）ゝ（し）ゆ（ま）ゝ（す）ゝ（し）

一又云高世うたはのけ者〻むとひろ〻中とあり〻これあるよりこれを
中〻ちろすよ及てす
一又云こしうたはおろ〻中山半あり
一又云うたはるよどひあ〻ふ〻中ひりあり　頁文云其比ヨリ（天文ノ比ナリ）ごとあり〻世てありしあれどあり〻ふ〻云ハおろすよりとあるナルベシ
一又云うこうはおろ〻ふ〻中ひて〻ふるるとうあるきるもひくんぶ程ロ
伊与ちく　頁文云ひるうはをうごいひるて〻ふるるすしてきたといふなり
一又云うはをて弓を人るおせひるるあ〻ふうと我とするこ
一又云うはるよけ時るる皮ふかのこの皮こ八幡を奉度ける代よりよるこ（鹿）
一又云うつはのふるる割よ若るうたるる皮ふさぎと中〻
一又云儀の皮ふりてよりうたはるよ公方ける
つはるうるるるよ〻ひうりたる伊与
一又云うはるうけぬ皮のるる（羚羊）（水牛）ちる皮し祢これ皮るる（唐）かをてはひ（皮）（羊）
るる〻ふけぬこ又程の皮ふをくんのるるる見ようる〻おるるず
一又云うたはより考をぬき出ようもり文り出ようたる考ふ伊与
一高世頁書云うはの根おふるまぶ〻祢をうはとてみるこれるる
祢ふふりしこう〻筋ちこるどおひるるぶ〻さるるるるて考るるたを

るるをやぐて人るるる伊与をるるをさるるるも人まる〻せで考を射を
るるをとを〻せ〻じぶたるる昔の人の右考る〻高代のうはおよ
作ふ〻てる〻の草紙るる考ふるこれるるるるるよふ伊草をる〻
さるるさるさ〻るるるり
一又云うはるをる〻きるどる〻るの津考肩るる〻れふ後（思るる〻
考を出〻かる〻ろてるるるさこ又あるるよ前（ずるるるるきも
かどる可付又かるられるよ付れふ考もいぶ〻るるるををまれぞ
考ぬるる色付る歩ふて考あ考時る足のるるも考ちち出こ入
をるる〻し又ふ（矩）るる付るるぶるる（マウスグナルヨリ云）
一又云うるれ祢の津るるるよ付るるをぶ祢をとを云後の傷こけるる祢とふ（羊毛）
ふ〻ぶそこを云れるよ付る祢をぶうけ祢とを云うけ祢ををするの祢を
るるを祢るるりるる
一又云伊考をふ肩るるるるるるるるるるるるを付るる云
一弓馬ふ考云うれるるるるる皮の津虎皮年人詩砂をる〻考ふ祢庵又
（或本ニ祢ノ傍ニ樟ノ字ヲ付タリ樟ハクヒカトヨム鹿ノ如クミテ角ナキモノナリ）
然祢ふるるるるるるの祢るる皮ふるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるる方を或ふ青漆（ウルシ）ふ赤漆（カルシ）ふるるるるるるるるるるるるるるるる

大略わそうわかとを結皮ようやくまを添ゆとする之 貝丈云わそうわハ珍そうわとも云

一又云うわ外て白ゆ弓打る時ハゆあ〳〵をまし紀事之りうう

かて的射ゆ時ハ略〳〵ととうら（拵ゆて射るゆゑ）

打るゆ〳〵

一又云うたわの事 琦ゆうゆわ外そうわと云ゆ外ゆ云わ彼也

貝丈云琦ゆうたわとハ毛皮ゆけゆるを云 毛皮ゆけゆるゆうたわを云 ゆうたわとりゆゆる

的出 結紀云うたわをハ一ツ二ツ又二十三十とゆ（一ほとハ多ハいうわゆる

皮をハゆけ皮とゆ（一枝ゆ〳〵ゆとしとハわゆハ

一又云うたわのことゆ（しうわのゆとハゆさすハ

一又云うたわのゆとゆハ高流ようかを中之 秘事之 貝丈云うわの内ゆ小太刀を入ゆ（

一上賢抄云うわゆとゆ云ゆ之（うゆ）

一又云うわゆうゆ皮伝ゆ定ゆ（うゆ）

ゆうゆ者ハ高どゆうゆ者を射たくしゆ者を人ゆ又ゆ也ゆとゆ皮をけていゆ今のうたわ

一結書高用抄云うわをゆ家の内ゆて外ゆうたゆ

一書礼雑之南書云うつわを人の侍りゆ（ゆきて置てゆ（きゆり

一供立日記云うつわの外紙の事先者ハ先ゆうゆ（しうつわのゆ（ゆ）

ハ先ゆうゆ（しうつわのゆ（ゆ）

ひさをかど（押ゆて丁外之

一又云ゆ内ハうわをあ〳〵縄ゆて結ゆ外ゆ内ハ丁結也 貝丈云ゆ内ハうわをあ〳〵縄ゆて結

弓外ゆ外ゆ也ゆ外ゆ内ハ丁結也 貝丈云ゆ内ハうわをあ〳〵縄ゆて結

てゆ（ゆ）ゆ外ゆ内ハ丁結也 事うつわの積の方ゆ外ゆて結

ゆいをけで表ゆ（流れゆ〳〵ゆを之ゆて

一毛之結取流之事云うつわの方ゆを之

事ゆ之封目ゆ之（ゆ）ゆ事一ゆ〳〵ゆ

一又云ゆ〳〵ゆ内ゆとゆハ琦ゆうゆうつわの事之事ゆうわハ外ゆとうたわゆと一ゆ之

貝丈云琦ゆうたわゆうゆ外ゆ云ゆ毛皮ゆけゆ

外ゆとうゆハ毛皮ゆけゆ（ゆ）ゆ

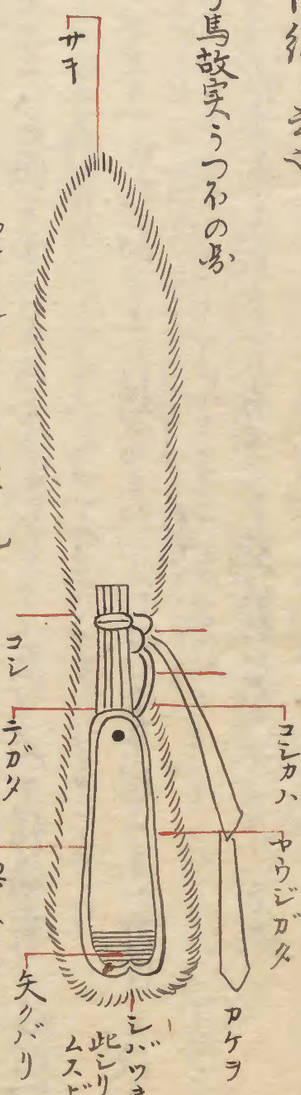
一弓法私書云うたわをハ外ゆとゆ（ゆ）ゆ筋ハ頭ゆとゆ（きゆり

弓法私書云うたわの事

一又云うたかの名乃事 弦をたてうけ弦 うけ弦 かまど まふたま
矢ぐろ 以外名のある事ふしうつをを一ツ二ツとゝるもあるゝ唯一ツ
二ツと云〳〵

一こる恵史書別記云うたかれとの事長き弦とふうの事とゝ云ゆひ弦をかう
け弦と云ゝ

弓馬故実うつかの事



一弓法秘伝書云 騎るうつかとハいそ ず ハいうつかとゝ云ゝ
一又云或流ようつかのかとハかゝ云うたかのうけ皮ふとゝ云ゝ 皮

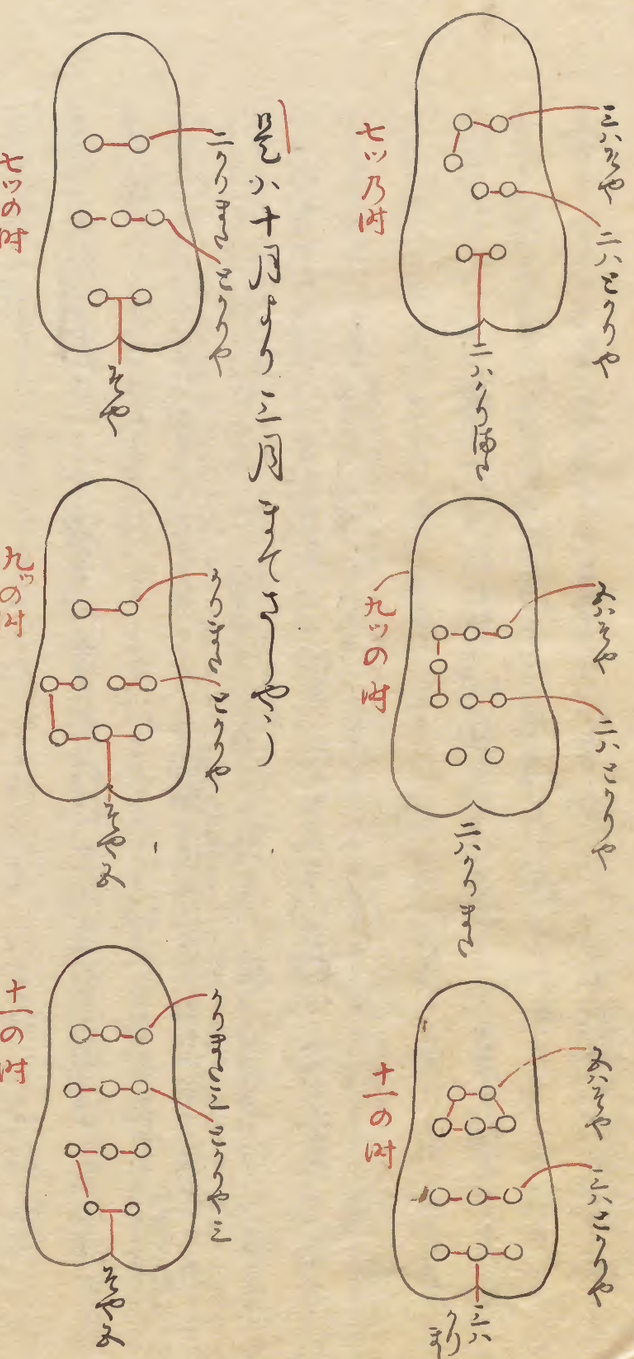
○一うたかの矢さきたて 射師拾遺抄云うたかの矢さきの事 七九十一ふてなゝし
たゝ たかハ伝矢ごとりやかとハかりのさきをあけりはをあけてよる
さきすしたもせん又一ツかゝをたたるもの行のそれハうはのうへ中さきゝ
一射師拾遺抄云うたかのよるだんごゝさきするもゝ二ツいさきすゝ
あもひ二ツさきすゝもむちをさゝてたゝしうすゝ
一是和記云うはかの分伝をそ伝よもるもふし 身又云ゝ弓かのことハかの
ゝさきすゝ矢乃事ゝ
一又云うたかのふゝさきすゝ一ツさきすゝ 伝れあり
一高恵尚書云うたかのよるをさきすゝ 沙弓の事 伝矢をハいちりのさきす
ゝ二ツ乃ゝ也二ツ乃ゝ 多彩ようりてさきすゝいくつとハ定ゝ伝十
八ゝ十二三まての事ゝ矢の数さきぬゝとゝようりまさをさきするゝ
加也ゝ ハ二とゝも分者の二乃をあけてさゝるる也かゝふさきすゝ
ゝ伝たのよるまんはよ一ツさきすゝ 又伝矢七九ふとまるあ射ふゝ
かの分乃方よかゝるてたすゝ さゝゝとゝとゝふけ伝ゝ又ゝ
たす射ふゝまのありひかあけてきてまん中ゝ蒲をもたするゝかゝ
ハふゝてゝさゝぬゝ 又云うたかゝ矢をハたるゝようりようゝ
ちんとゝさゝふゝかゝ也者さゝすする射とハさゝず南流よもやとていもゝ

ウツホニ矢サス

一又云うたわのよりたんとうさす（きさる　貞丈云うたわの上とはうつわのそとよ　ほうさすと　ほうされたんごうとき）二りさ
す（敬をさしてきこむちをさうずしてたんごう一よさするあるゆ
きこ又たんとうこりうす（きこはさすはむちをさしてをしむちをさすし
てはさするゆるまし（きこ又神代一さして敬をもすこあとの神代をさ
すとをむちはさす（きこうつわを分てむちをさるゆふあるゆ（きこ）能分代し
ゆるこむちをさすとも神代はさするゆこ（うすむちをはさす（きこうれ
とをたん神代はさすはは神代一こゆるとさす（し神代二代ゆるとはむちをさ
さてさすゆるとまし代こさゆ〳〵ゆとこゆはは神代さすと同ゆはるうむちと
たんごうとさすははむちをゆるとへてさす（し又こうつわを分てはむちゆ
さすゆるすゆ代ことゆる年考ゆどゆるゆ（きこ也又云神代をゆ神さすゆさゆ
くはゆ者ゆはゆすゆ年こさゆるゆよりてうつわゆはいまゆるゆこ代ゆゆとゆる
はゆうつわゆこ入ゆるもゆるゆ〳〵ずそれゆ時代こを年ゆと入てもゆ者
又云代月をはうつわのゆゆとはゆす（きこ）又ゆ者中間ゆもさす（し教
はたんどう同年こ

一又云うつわゆこさすゆゆとてこゆら（ゆう別ゆはゆ〳〵代ゆをさすこうつわゆこさし
ゆるを見たるゆはゆきゆとてすげゆゆをそゆへてゆるこゆゆれゆ法はゆきゆり

一扇流云矢七九さすはまゆゆをさし〳〵はゆすゆとゆさし〳〵さゆゆるゆゆこ
一高忠周書別記云うはゆのみはゆを伝教八七九十三さす（し方ゆゆをあげてさ
す（し又ゆゆをさし流ゆゆゆはゆゆをはゆまん中ゆうはさし〳〵はゆ（しこさす
中ゆさゆはゆゆゆ



是ハ十月より三月までさしやうし

一又云うしの年よりそだんごうるうるんどをさし流で明の方をもしぼりてさうさ海をさすべし自然の付ぬきちく（ますきを）危きるこ

一弓馬故実云うしの年よりそさをもさし拵こと平他流よりハ年よりさし拵ることを云ふ南流よりさ海ふし次第くよりみ方の方をあけてさすしうまいも

一又云ねの年よりさ海ぶんどをさし流で明の方をもしぼりてさうさ海をさすべし

ゐくハゐゐくゐす所位なりこの時ハ三月なり

一 弓馬聞書云ふたりよさすやの数の事七九十一まてさすゝ七の時ハ征矢こゝ
かりまい二ちと かりやこゝ二つ以上七つゝ九つの時ハ征矢九つ かりまい
二つ以上九つゝ十一の時ハ征矢九つ かりまいこゝ二つとりて矢こゝ以上十一也さすよ
ゆゑなる流ることなる秘伝也

一 上賢抄云うつのみとゝるゝ〳〵ゐうゐのそやとハゝうゐさすやと
て受ゐ〳〵ゐ征矢を数を受てさすゝき也

一 法量抄異本云はゐのみの事白篦かてゐゝしゆゐくさハしゐるハをゐゐ
位征矢ゐとハかゝゐ者ゐゐゐをハさすゝき事ゝ数ハ九ツ分よりの方とあけく
ゝをゐるよさすゝ位数ハ七九十一ゐゐゝしさす次分ハ別ゝ記ゝ

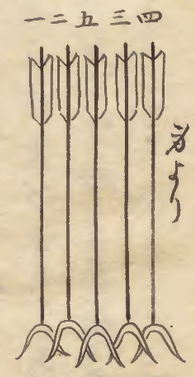
一 書記雑聞書云ゐゐよ矢をとさゝをハ分ゐよりとゝ次分よりよ秘をさすゝし
ゝ七九ゐ降さよる二さすゝし秘を六ハ行す降一為別六ハ矢を移ほしきゝ 自矢六を矢ヲ尽ゝ

一 弓法私書云ふたりよさすやの位ゐとて別よあるゝ〳〵次位矢をさすゝき事
ゐれたゐゐよふたけゐゐをゐゐゝてのごい篦よゐるゝ羽の分ゐゐゐ位矢ゐ羽
ゐをけゐゐをゐゐゝて指てさせぐゐゐゐゐさゝ根ハ九根ゐそれをんだり
ゐそれ又九根鈎尾ゐ合てもをけゝしりまさハ二ツゝ二ツゝみゐゝさするり

一 射法持長記云ふたりよゐを七九十一さすゝ也征矢こがりゐをハりよさして
上よりかりまさをあようをあけゝてさすゝしかりまさハゐゐ篦羽ハ位之篦ハ
うゐくずるとさてさすゝし庫ゐと射ゐる時射とゝて猪事羽うゐと引
ありて見ゐる血分ゐりゐれそうゐよハかをゐうゐよハかをゐゐゐ又ゐり羽と六事
かゐゐゝとかりまさとふかさうゐゐゐ

一 射ゐ方聞書云ふたりよゐ六さゐゐゐゐゐいゐりりさすゝしかゝハよ
くずゝゐりまさはけいゐゐゐゐゐ但秘ゐ事あゐゐ見也いゐゐ
の根をもさゝゐ上よハかりまさをさすゝしゐるゝゐ根ハ伝ゐりさすゝし
上矢ゐりまさのゐゐ完ゐゐゝゐりまさハ分ゐりのゐさをよゐさゐゐゐる
也たゝふあゐゐ羽とやゝん中ごゝゐごゝゐ分ゐりとハ我右ゐさゐゐゝしゐ
ゐゐゐ篦よハせゐる也

一 弓馬三冊云ふたりよゐゐをさすかりまさを三ツ事のかゝゐゝ
みゐゐを篦ゐゐゐの二ツの事ゝいゐゐゐとよゐゐゐゐゐを一ツさすゝし篦
伝ゐりまさのさゐを分ゐゐをあけてさすゝさゝあゝてゐゐゐハ
一ツさすゐゐゐをさすかりとゐ数七九十一ゝかりゐゐゝをけ分ゝ

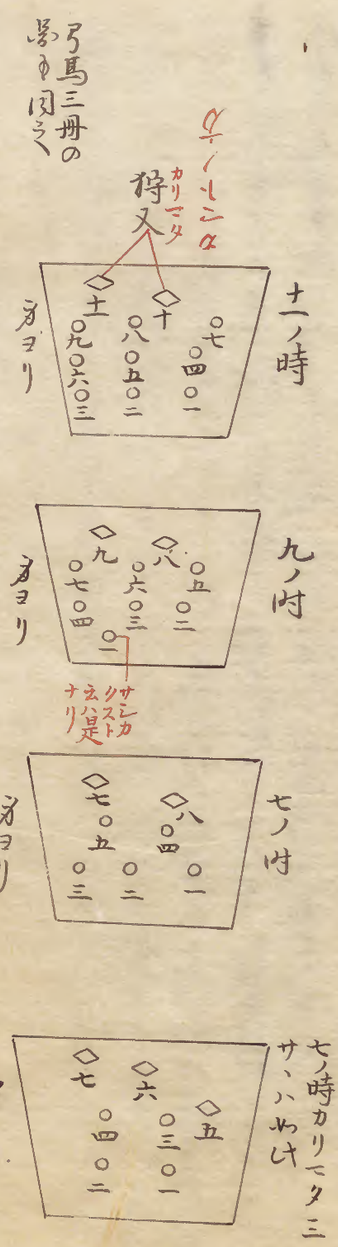


如此ひくまの
ほえ次第ニ
矢ヨリ上げ
てさすなり

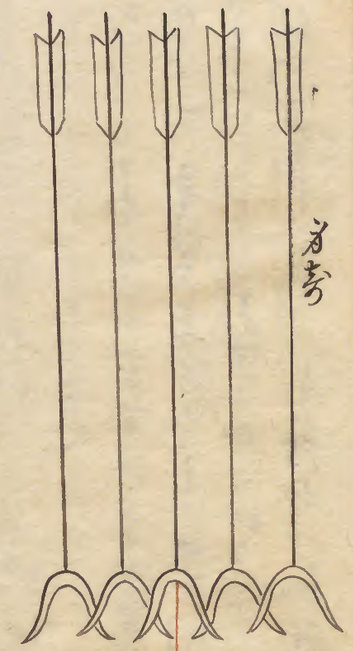
一 弓法私書云はわるさす矢の数の事七と十九さすべ九とさすべうまさ
ハ二と三とあるとさすべうふくをもさすべき事なり

一 又云矢のさし様ハ初れ右ハ上はかの右ようさ初て次第ニ矢ヨリ上げ
てさすべし如うまるとし一のうちかそれのはさきをわけて矢の方をそ
上げてさすべうりまるハ二と三とこれ矢とさせあの矢数ハ七九十一まるべうすかり
まるを多くさす時ハそれ九根ようそもをんぞうそもも別のあを雁俣の数ま
合てひけてさすべきそ七さす時うりまるを三さすバ別の矢を四さすべし九さす
時うりまるを三さすハ別の矢を二さすべし十一さす時雁俣三さすハ別の矢ハ
さすべきそ又うりまるをあさす時もけ数るべし七さす時ふと雁俣をあさ
さハ悪きそ九十一さす時ハ若うべ次第ニ伝ヨ申てもさうさ矢を多さするう
物ものの時ハうりまるを多さすべ又遠矢ふとさうさ時ハわるさうし
てさすべきそ矢ハ九根と雁俣とをすをんぞうと雁俣とハうりもさす又
九根をんぞう雁俣をうるす十伝とうるべうし次九さす時ハ矢数一さうかるす

（矢をハ次第ニ矢数をあけてさせどもさうかるす矢ハ矢数をんぞうもわけて
わるさすとそ雁俣三さす時も次第ニ矢数を
矢数をあけてさすべ矢ぞうの間いうそもあん間数ニ間を矢ぞうあけて
さすべし九さす時ハ矢数ようこ中とさとふ二つさして上ようまるを
さすべし伝ヨ矢数ようさ



一 又云うりまるをあさすハ次第ニ矢ヨリ上げて
あるさすそ又四を二つ矢ヨリて中を間をのあけて矢ヨリをハ
伝ヨ矢をを上げてさして中ニ今一つのうりまるをうるべうをさすべ上
まるさすべし伝ヨ矢数を上べし矢ハ特ふとの時雁俣多射時の事なり



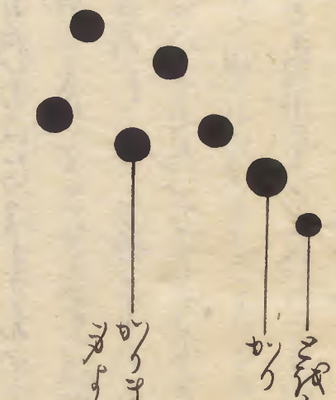
此一ツハ上ニサス

一又云、引わるうゑ〳〵をさすなり孤ヲうまをニツ矛のやくそくをしてお間を
廣く加ゑ〳〵のを間（アイ）へ入れるさして上るかゑ〳〵を一ツさす〔し〕也を伝もかり
まいのをさゝをもをよりをとゞけてさす〔きこ〕あてうゝ引わるゑ〳〵ハ一ツ
さすこゝゑ〳〵をさすハけもゑ数ハ七九十二ゑ〔しゑ〕ゑ〳〵ハ此矢数の和ゑ一ツ
ハもこゝ九さすハけゑ〳〵さ〳〵ハ十（夫数）、十一の内十二、七の内ハ八ゑ〳〵〔きこ〕
一又云ハ内ゑ〳〵ハ引わるさすこゝ〔きこ〕ゑ〳〵ハ股ふさしてもゑ若こ

貞丈云右の本文ニハ股ふさしても不若と云詞ハゑ〳〵ハ本ハ股ふさ〳〵ざるゑゑんとも股ふさしても不若とはゆ是あやまりなり〔し〕古軍ニハ股を肩ゑをゆ式とす合戦の初ハ必矢人のゑゑ〳〵を射るけるゑらハ股のこうてさしのゑゑ〳〵ゑゑ〳〵を射るゑんで股ゑゑ〳〵をさすゑゑ也ゆ式ゑり

一八廻日記口伝云的矢を一ようつゆの底ゑ入事ゑ細こ後ことゆ也うたゆのそこゑ
ゑれを入ゑ也一説の秘説也的矢を陰陽の矢と云云陰陽を秘事とする後こ又
云和を射るゑハ伝も射あてんと思ゑ事勿論こ但別ゑてはさしゑと思ゑゆをけ
的矢ゑて射ゑこ云ハ的矢ハ事生的を射て能く射ゑ〳〵ゑゑゑゑ的矢ゑ云
又云いはく〳〵それも自然的ゑ〳〵ん付も弟射ゑんゑゑ的矢ゑて射んゑゑ
もあゑこ伝ゆ〳〵しきづゑん人の云ゑ秘事こ陰陽の矢と云ハ的矢ゑ陽こ
一尚流聞書云ゑ忠細川政国（ゑゑ）雑徒ゆ中ゆ者ゑゑを矢ゑ引ゑて
事ハ行て中ゆ伝中ゆ伝ゑつゑゆと中ゆ政国ゑ射ゑゆこさしてをゑ和を射
（きゑ）ゑ〳〵ゑ伝ゑゑたゑゑゑゑ

文絃号



文明十一亥年六月九日

多呪巻後書

こる患列

サカツラ服

○一逆頬服（サカツラ）　射手拾遺抄云ハさうはゝ多ひゝ和之　矢壺　ちこかゝ多ひゝ

あとゝ略絵之但射ゝ付ゝ　矢壺　ちこかゝ多ひゝ

一射手持長記云ハひゝハさうつゝ和之　ちこかゝ多ひゝ　矢壺　ちこかゝ多ひゝ　略絵之

一云恵世文書云征矢ハふりはゝさをハさゝゝ　貞丈云ハ征矢ト云ハエビラニサス矢ヲ云カヒソヤトヲナリ何エビラニテモ同シ

一又云征矢をハ和ゝと云うゝをゝ付ゝ云之　貞丈云ハ征矢モ同ジナリ征矢ヲ負ト云エビラヲ負トハイハヲ也是即箙ヲ負ナリ

一路云日記云和ハ征矢ハ廿本矢和ゝ　草服ト云ハナメシ草ニテツヽミタルエビラナリ

ゝ多のさうはゝ多ひゝ和ゝ

一又云路云ハ廿本矢の中ハ人の家ハ十六矢も多ゝし　服ハ

ゝ多ゝし　貞丈云さうつゝ箙ハ箙の正面と左右とを毛皮ゝて包むこと毛ささきハさうさはゝ上向也正面の毛ハ右左のうつゝ向ひ右左の脇ハ毛ささきはゝ上向ゝ左右の脇ヲ頬と云人の面も左右のそばつゝを頬と云ハ猪の毛皮ゝて包むこと猪のさうつゝと云ゝ云態の毛皮ゝて包ゝるを態のさうつゝと云ゝ箙を式正の毛ひゝ多ゝ

次ゝ矢ゝ付ゝ上箭の津紀ゝ多ゝ長さハ八尺斗ゝすゝしたゝ紙矢の

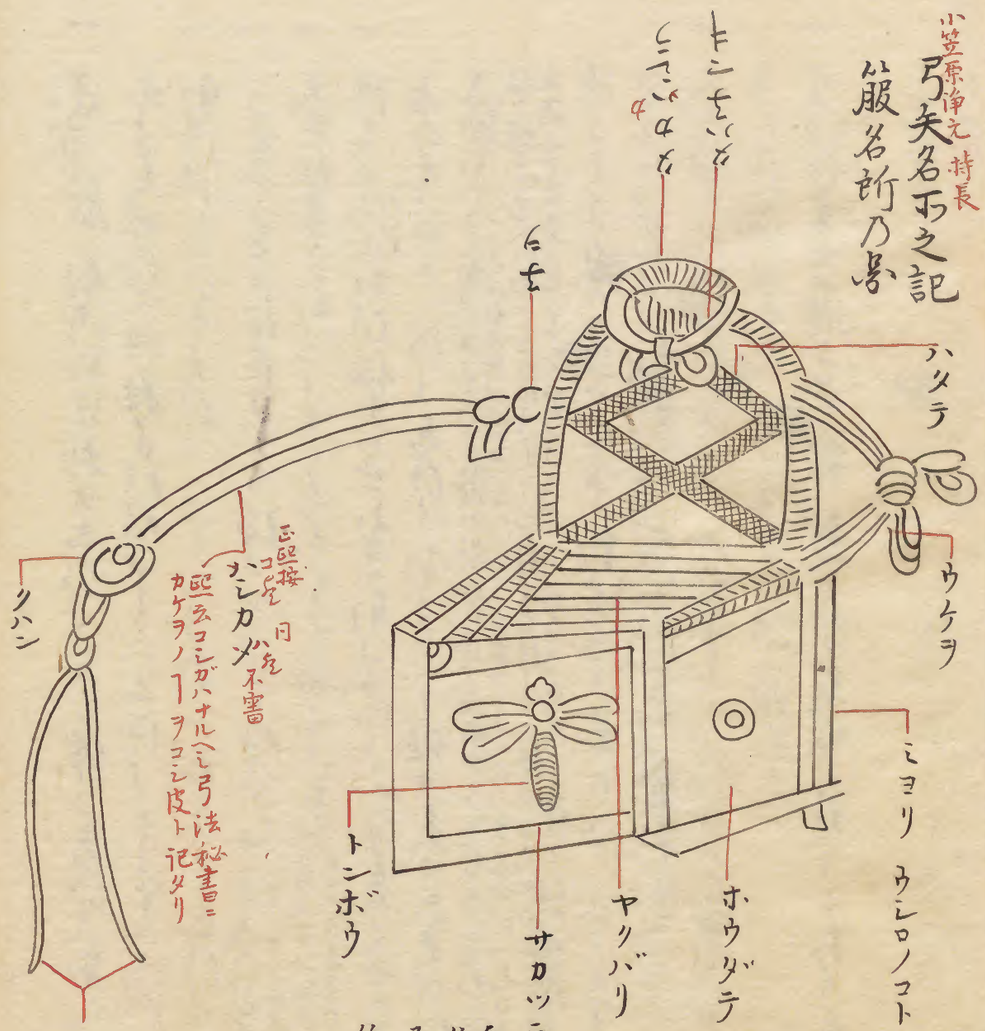
ゝ付ゝ紙ゝ付ゝあり　貞丈云矢ゝ付ゝとハ矢の矢の付ゝ多ゝとハ多ひゝ和ゝのあひ紙とりつゝすゝ

一又云路云ハ廿本矢の中ハ人の家ハ十六矢も多ゝし　服ハ

ゝ多ゝ於尚家（小笠原家）ハ右さぐり矢を一ゝ也一ゝ用ゝ

一弓法私書云服ハさうゝ箙ハ箙と云ありさうつゝ箙和ゝ

小笠原淨元持長
弓矢名所之記
箙名所乃事



負又云サカツラト云ハ
名所ニハアラス熊皮
又野猪皮ニテ包タル
箙ノ惣名也

草箙

○一 草箙 射所拾遺抄云 ちこ草ちゝ〳〵ちゝとハ畧後之 さゝ〳〵の条
射所持長記云 ちこかそちゝ〳〵ちゝと略後之 さゝ〳〵の条

サレ版

○一 さしえびら

一 弓法私書云さしえびら

貞文云板ニテ鎧ノ如クサレザットウルレニテ
スクヒスミ〳〵ハ黒クキテウメニヲトリクルナリ

前後の文さうつゝ
後の考るまろす

狩箙

○一 狩箙 貞文云カリヤヒウ氏カリヤナグヒトモ
ヒ、ヤヒラトモヒ、ヤナグヒトモ云

一 弓法私書云かり多ひ〳〵 若後乃文さう〳〵
多ひ〳〵の系に記ス

又云狩ノ時ニ用ルユヘ此名アリ
狩トハ鹿カリノ事ナリ

○一箙ハ矢をさす（同矢ダバ）弓法私書云ゑびゝよ矢をさす半丈ハ矢をハ丈と云
丈矢をハ四丈とさす也丈矢ハさゝる程よゝろゝくさせゞひゝよ四丈ハ方も
心ゝて廣くあさするの廣さ程よゝせゞよゝさゝ十六矢をハ四丈とさす也
何も矢をさするハ五つのふゝの間を切へむけぬ程よさすゝ筱のうけ紙
乃ちゝ方を矢ゝゞうの竹ゝ云ゝうばゝ間を巻て上の矢ゝゞうの革ゝて結
ゝゝさす一ハ卯向るゝゝし丈あをさゝて上の矢ゝゞうをひゝ皮ゝてこし
ら入て丈方ゝ穴をあけて矢をたゞめる革のりゝ丈ゝて結ゝゝしゝゝを
きゝゝあるゝたゞゝ革ハ表ハゝ革のさきをとんがゝゝらゝ切て丈ゝふゝ
結てゝゝたゝゝ丈ハ筱ゝゝゝゝ人動ず汁上を結ゝ筱の矢ゝろ丈ハゝ
ゝす汁上をたゝゝゝゝゝゝゝゝ革の廣ゝ丈分ハゝ出サハ矢をゝ
巻ゝ丈さてみゞゝゝゝゝしもゝ丈て結ゝ結ゝ結ゝ結め矢の表ゝ丈ゝゝ矢ゝゞう
丈ゝゝ革のゝゝ丈ゝゝ又十六矢ゝゝ矢ゝゝとの付羽の方をひゝをんと思ゝゝさゝ丈を
廣くさすゝし返ゝゝ矢ゝをさす付羽ゝゝゝゝゝの付羽の方をひゝをんと思ゝゝさゝ丈を
（むけてさすゝ）何も四つのゝどゝさすゝ矢ゝをゞ走羽を角へ丈ゝゝゝゝゝゝ
たゝゝゝさせゝゝおのゝゝゝゝゝゝゝゝの間中へむゝゝゝ

一又云ゝゝゝゝゝ箙を結ゝゝゝゝゝ丈ハ方廣ゝ異ゝの上ゝゝゝさせゞぬけかゝゝ程

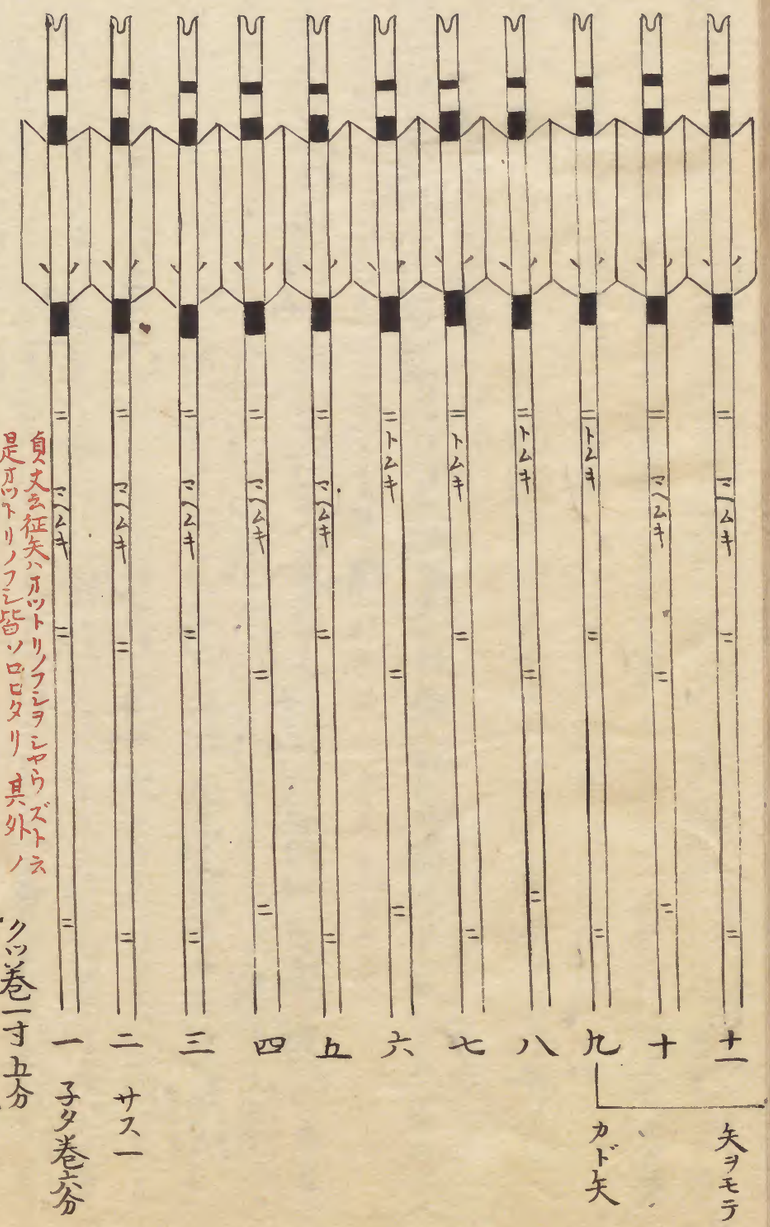
箙矢サス同矢ダバ子

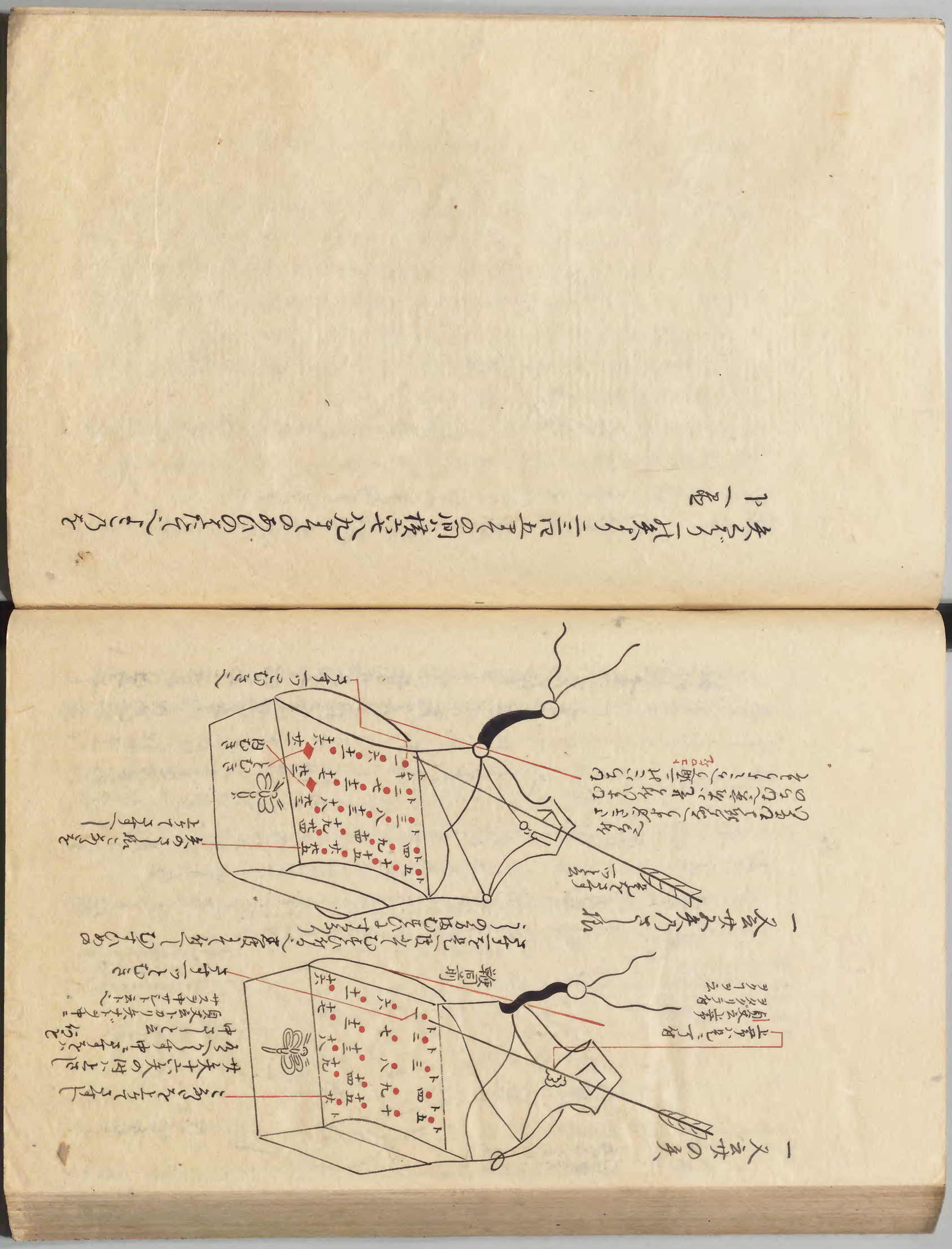
小筱のうで（ワキノ方ヲシカシノヤウナルホナリ）とゝるゝ〜らの下と二所よ紙ようゝて鞦のさきの方おこるゝ
ゝる結分多〜ゝ付ハ下の結目ハうゝとさゝてゝ（貞丈云ムナサキヲ上ヘナシトツカ）ぬ〜ゝ
ヨリ（ナシテウテヌキノ緒ヲモトヽカト一ツニ
ユヒラノウデニユヒツケヲクナリ）

一 射手拾遺抄云伝矢乃ゆひ不復のそげさゝとゝ詞ゝ
むゝさゝ草詞ゝ

一 射手持長記云そやのゆひ不そげさゝとゝ詞ゝ草ゝゆゝ文
云伝矢ゝゆひてハ必むちゝとさゝゝ〜〜色〜〜

一 軍陣用書云そたゝゝ草ゝ草ゝ草ゝ草ゝ草ゝ草ゝ草ゝ草ゝ文
不定矢ゝゝ〜〜〜


ニトムキ
ニトムキ
ニトムキ



国立公文書館
National Archives of Japan

○一箙上弟　射法拾遺抄云箙ハさうはゝ（中略）上弟のゝ篇〻ふりかゝ
ゝ也もあるゝ上弟をひくゝとりのハかゝそのまゝうらゝ
一射法持長記云箙ハさうはゝ（中略）也上弟をひくゝとゝ云ハこゝまゝ
一隨兵日記云ひ徳矢ハ長ハ（中略）前記矢ハ分ゝ上弟のゝ紅ゝ
矢乃分ハ長ハ八尺斗ゝ
一弓法私書云上弟たゞ（中略）返り〻教ハ九こも七こも
ゝ返ることゝ也ハ二巻まゝ
ゝ也ゝ
ゝ上弟とたゝ
ゝ上弟の大サハ大方長ゝ
ゝ大遠ゝ

箙上弟

たゞ
たゞ
たゞ
たゞ
たゞ
たゞ
たゞ
たゞ
たゞ
たゞ
たゞ
たゞ
たゞ
たゞ
たゞ
たゞ
たゞ
たゞ
たゞ
たゞ
たゞ
たゞ
たゞ
たゞ
たゞ
たゞ
たゞ
たゞ
たゞ
たゞ

○一　矢保呂　射師拾遺抄云矢ろくはぬ半絡或ハ紺ゐとも色〻すゝ
ゐももゑふ色そずの方一尺二寸ばかりすきをあらき糸にて
又ハ赤さゝえよくろさ葦をうさ○てもゆゑ〻ゑび〻よりくるはふくろ
のこと〻くろを糸にてあるゝしちんゐとふを糸の好よりうへさゝ
一　射師持長記云矢ゐろのゐ紺にて矢さを葦にて組てもゆへ
上をを尺弐寸ばかりにてをさをを葦にて組てもゆへし
すそにゐをを入〻矢を引入〻矢ゐ色しのさふをてゆゆ〻し
一　軍陣用書云矢ゐろの半十六矢ハ二をゐはゐ矢ハ二をゐはゐ
ゐふゐろのを下入おれハ一尺二寸ばかりたゐだゐはゐ定うつれ一尺二寸ばかり
をばゆゑすぎさ〻但ゐろのゐふをふゐ〻ゐ〻すそばゐもばゐ
ゐ色を矢ゐかゐゐのもさおれをのゆて矢はゐのもさゐすゐ矢ゐあて
ゐひて指し但ゆ矢ゆゑ矢乃付ハ矢のゐすばゐ方ゐ〻あゐゐうゐつまり
てゐ矢ゐ〻おハ矢〻して矢ゐををてゆ〻ゐとゑよさ組ゐすし矢れ
のゐをふゐをして女むすびゐ結てゐゐ斗ゐらのさををて引ゐゐ〻
さすゐ乃ゐゐ〻みてゐむし矢れのさをふゐをハ赤葦と赤葦と合
て赤葦をゐゐをて女むをひかして切〻又我家のをんを外ゐる附ハ矢れ

矢ホロ

かぶと羽のこしらへかぶと可付又引ぶくろとんと二色付かぶとんをふ
ぶくろに付て引ぶくろをそ羽のこしらへ可付又むりんゐもすべし色
可定

一 射手方用書云先行ろの半ばに行かぶとゆ好ゑ考ひて可用也

一 随兵日記云矢ばうつの色に知りえざ図白くも又ハ朽葉色ありすべし但
うつたれゑ我家のゆんをぬいあふて織付べし図考ようけて羽の通りよ
可記ぶくろをくろくぬり付べし為考ろうろうゆハ異後也

国立公文書館
National Archives of Japan